

浄土

七 月 号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授承認雜誌第三五二号)
昭和三十六年六月二十五日 印刷 昭和三十六年七月一日発行

第二十七卷

第七号

最新刊 浄土トラクト

村瀬秀雄著

月影抄

御法語の栞り

本誌「扉の御法語」として毎月執筆中のなかから著者が七篇を選んで解説を付して新らたに浄土トラクトの一編として刊行

目次

- 一、上人のご日常（われ聖教を見ざる日なし）
- 二、浄土宗の意義（われ浄土宗をたつる心は）
- 三、道を求む（かくの如くして昨日もいたづらに暮れぬ）
- 四、決定の信（我は烏帽子もきぬ法然房也）
- 五、弥陀名号の功德（無礙光とは）
- 六、信仰のすがた（つみは十惡五逆のものも）
- 七、念仏を勧める（不慳大士の枝木瓦石を）
- 八、あとがき

東京都千代田区飯田町二ノ八

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

B 6 版	十六頁
定 価	十五円
送 料	十円
二十部以上五分引	
五十部以上一割引	
百部以上一・五割引	

中村元（東大）・増谷文雄（東京外大）編集
ジョセフ・M 北川（シカゴ大）

現代 仏教名著全集 全十巻 予約募集

A 5 版	四三〇頁
八 ポ 二 段 組	
価 各 八〇〇円	
〒最低小包料金	
全 七、〇〇〇円	

- 一、東洋文化の粹、仏教研究の精華を集成した現代の大蔵経
- 二、現代仏教の研究成果はこれだけ読めばその全貌が解る（四十篇余収録）
- 三、貴重な絶版ものや得難い書籍がまとめて安価に得られる

第一回 第八巻 好評発売中

日本の仏教 (3)

圭室諦成 『日本仏教史概説』
中村 元 『近世日本における批判的精神の一考察』

第二回 第三巻 好評発売中

印度の仏教 (2)

宇井伯寿 『印度哲学研究』の諸篇
木村泰賢 『小乗仏教思想論』

第三回 第九巻 六月下旬配本

仏教一般 (1)

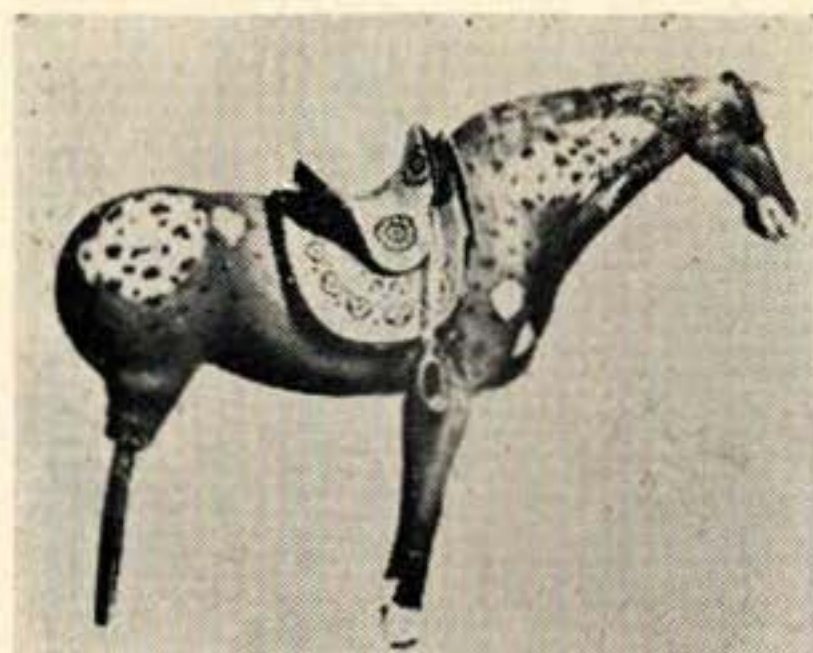
島地大等 『天台教学史』
梅尾祥雲 『秘密仏教史』

隆文館

東京都千代田区神田佐久間町二の一
振替東京一五三一〇二番
電話（八六六）一一〇一一五番

浄土

七月号



写真中央アジア・アスターナ
墓地出土品（七世紀）一馬の土偶

本願の念仏には、ひとり
だちをせさせて、すけをさ
さぬなり。「念仏問答集」、勅
修御伝第二十一、常に仰られ
ける御詞)

法然上人御法語

浄土 七月号 目次

表紙……大船の観音さま・扉……アスターナ出土品

絶対の信頼感……………佐藤賢順…(二)

お盆を迎えて……………佐藤良智…(三)

室の津の遊女……………鈴木成元…(三)

話 天津の女ゆうれい……………吉岡義豊…(六)

実 盲信の家庭……………(九)

近代高僧伝 野上運海……………大橋俊雄…(三〇)

童話ほとけさまの鈴……………ぬのむらてつや…(二〇)

働くものの響……………大田敬光…(六)

落語のあれこれ……………吉田雅男…(三)

中国綺談 小さき精霊たち…牧尾良海…(三)

念仏に生きる詩人……………戸松啓真…(三九)

棚経と母……………(三)

工場と教育……………(三)

念仏飛行……………(三)

車中のすい客……………(二)

扉の御法語解説……………(二五)

表紙の写真説明……………(一九)

会員だより……………(三)

聖典 講義 生きている宗祖……………竹中信常…(三六)



絶対の信頼感

佐藤賢順

ことしは法然上人の七百五十年、親鸞聖人の七百年の御忌を迎えて、この二人の聖者が日本精神史の上に遺した大きい足跡が各方面から回顧され、再認識されていることは、まことに意義深いことといわなければならない。この二人がかかげた灯は不滅の光を今に至るまで放って、現代のわれわれにも歩む道を示している。春もまだ小寒い頃から何万何十万という団体参拝が京都をめがけて群参しているという事実をみても、庶民の生活の底に両聖者の教えが強い底力となって生きていることを考えさせられるのである。

この機会に、法然と親鸞との関係についても、あちこちで新たな視角から、問題が取り上げられている。それも当然のことであろう。私もこのことについて、二三の随想を述べてみようと思う。

いうまでもなく法然は浄土宗の開祖、親鸞は浄土真宗の開祖である。法然の宗旨と親鸞の宗旨が違ふとすれば、その違いはどこにあるか。また、親鸞は法然の弟子である。弟子が師匠の教えを忠実に受け継ぐのは当然であるが、親鸞は果たして師法然を祖述しているであろうか。また、法然の教えは歴史的にみて、古い仏教、聖道門と、新しい仏教、親鸞によつて徹底された浄土門との、中間にあつて、多くの過渡的な未完結性を残しているのではないか、といわれるが、果してそうであろうか。——というようなことが問題点である。拾つてくれば、まだまだいくつかの論点があるが、ここにはいつも問題になるような点の二三を挙げてみただけで、一つ一つこれらの問題について答えるのではない。ただこの二人の一致するところと異なるところとの、両面を述べてみよう。

今から回顧すれば、実におかしなことであるが、私の学生の頃には、浄土宗の宗学者は、親鸞が法然の弟子である、ということになるべく言おうとしなかった。法然上人伝のどこにも親鸞のことは書いてない。せいぜい、七箇条起請文の終りの弟子達の署名に、綽空とあるのが親鸞かもしれない、というていどであった。七箇条起請文は、元久元年に法然上人が弟子達を誡めるために作った七箇条の誓誡で、その終りに八十八名の弟子たちが署名している。こういう一種の親鸞抹殺論は、もちろん取るに足らないが、中世以来の浄土宗宗学が真宗宗学に対して意識的に対抗したその現れで、それが明治の末、大正の初めまで尾を引いていたのである。私たちはそういう見方にかなり影響されていた。

親鸞が法然の弟子になったのは、建仁三年で、親鸞二十九歳法然六十九歳の時であって、二人の間には年齢の上で親子ほどの隔りがある。親子といっても、壮年になってから生れた子ほどの隔りである。その頃、吉水の樺房には、そうそうたる門下が沢山いて、親鸞よりはいずれも年上で、二十歳も三十歳も先輩であった。西山の証空は十年も前から入室していたし、源智、聖光、隆寛、幸西など古い弟子ばかりであった。浄土宗の第二祖、鎮西の聖光は、親鸞が入室した翌年、師のもとを辞して九州へ去っている。親鸞は弟子達のなかで

は、末輩の末輩であった。しかし一方ではまた、師法然の晩年の円熟した人柄に親しく触れて、貴いものを吸い取ることができたという幸運に恵まれていた。このことは二人の関係を考える上で、大切なことである。

親鸞は師法然に対しては全くの絶対信頼であった。「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをこうぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。念仏は、まことに浄土に生きるたねにてやはんべるらん、また地獄に落つべき業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり。たとい法然聖人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずそうろう。」という『歎異抄』の有名な一句は、その絶対の信頼感を示している。法然上人は晩年になって、しきりに「偏に善導に依る」と、善導大師に対する絶対の依憑を宣言された。ちようどそれと同様に、親鸞は法然に対する依存を告白したのであって、『末灯鈔』に集められた親鸞の消息には、いく度も「故聖人の仰せられた」言葉が引かれているのである。浄土宗と浄土真宗との区別についても、親鸞自身はもちろんこれを別のものとは考えていなかったもので、浄土宗とも浄土真宗とも書いている。

これまで浄土宗側の宗学者の立場からは、『選択本願念仏

集』は偏に善導に依るといふ立場から書かれたものであるが親鸞の『教行信証』は善導や法然に偏に依っているのではなくむしろ曇鸞の立場によつて見ると普通であつた。『教行信証』の信の巻では、曇鸞の『往生浄土論註』がしきりに引用せられてゐるばかりでなく、思想の構成も曇鸞から学んだ考え方に従つてゐるので、そういわれるのは当然なのである。真宗の宗学者の中にさえ、法然は善導に依り、親鸞は曇鸞に依つてゐる、と解釈してゐるものさえ中世には少くなかつた。しかし今では『教行信証』は『選択集』の再現であると主張する人達もあつて、この方がむしろ實際に近いといふべきであらう。

○

念仏を唱える行と、如来の本願を信ずる信とを分ける場合いずれを先とすべきか、いずれを根本とすべきか、ということなども、論議される。法然は念仏為先であるし、親鸞は信心為先である、というような類型的な區別をする人達もあつて、真宗宗学者は念仏為本と信心為本という問題として論じてゐるようである。しかしこれもそうはつきり分けられるはずがなく、法然上人が「一念十念に往生すといへばとて、念仏を疎想に申すは、信が行をさまたぐるなり、念々不捨といへばとて、一念を不定におもうは、行が信をさまたぐるなり。」（常に仰せられける御詞）といつておられるのは周知知

られてゐることである。また親鸞も「信の一念、行の一念、ふたつなれども、信をはなれたる行もなし。行の一念をはなれたる信の一念もなし。」と覚信房への返事のなかに書いてゐる。そしてそれに続けて、「というわけは、行というのは、本願の名号を一声唱えれば往生するといふことを聞いて、一声乃至十声唱えるのが行である。如来のお救いのお約束を、少しも疑ふ心のないのが信の一念である。一声、念仏を唱えれば往生できると聞いて、疑ふ心がないのであるから、行を離れた信はない、と（故聖人から）きいてゐます。また信を離れた行はない、とお心得なさい。」という意味のことを書きつづけてゐる。これは親鸞が八十四歳、建長八年の手紙である。人間の行動は信念がそのまま外へ現れるのであり、思想は実践に連続するのであるから信と行とは別のものではない念仏為本と信心為本とを対立させるような考へ方は、セクト主義が固つてきた中世以後のことである。

○

善人と悪人の問題についても同様のことがいわれる。浄土教は特別に素質の優れた人、智慧がすぐれ行いの正しい人のための教えではなくて、平凡な人のための教えである。愚鈍の者無知の者犯した罪惡に悩む者が救われる教えである。しかし無知でなければならぬ、悪人でなければならぬ、といふのではない。有知と無知とを選ばず、善人と悪人とを選ばず

いずれも如来のお救いにあずかることができるというのが浄土教である。法然は「罪人なおもて往生す。いわんや善人をや。」といわれた。罪人でさえ往生できるのであるから、善人ならばなおさらのことである、というのは当然である。善を喜び悪を憎む自然の感情を法然は次のようにいっておられる。「仏は悪人をも捨て給わねども好みて悪を作ること、これ仏の弟子にはあらず。一切の仏法に悪を制せずということなし。〔中略〕父母の慈悲あればとて、父母の前にて悪を行ぜんに、その父母喜ぶべしや。なげきながら捨てず、哀れみながら憎むなり。仏もまたもてかくの如し。」と。

実にこれは人間愛の微妙な動きを描いたもので人間が抱く愛情のうち、最も純化された親が子に対する愛情のなげきながら捨てず、哀れみながら憎む働きから類推して仏の慈悲を説いたのである。

○

罪人なお生る、いわんや善人をや、という言い方は、自然の言い方であり、だれにも解る論理である。人間が人間に対する愛情をもとにして、そこから仏の慈悲を類推した。いわば人間と人間との関係に立っての説き方である。それは道徳的立場である。仏の慈悲を説くときでも、一応はこの立場から説かなければならない。ところが親鸞はこれと反対のこ

とをいっている、「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや。しかるを世の人つねにいわく、悪人なお往生す、いかにいわんや善人をやと。その条、一旦そのいわれあるに似たれども、本願他力の意趣にそむけり。」（『歎異抄』）これは親鸞が法然に意識的にプロテストしたのであるうか。決してそうではない。むしろ同じことを仏と人間との関係から言っているのである。

それは宗教的立場においてである。人間が人間と対立して、お互に行爲し合っている関係からではなく、人間が如来の前に立って、嘘偽りなく赤裸々な姿で対決した関係から言ったのである。人と人がただそれだけのものとして対立し合って、あの行爲は善だこの行爲は悪だ、といってもそれを決める究極の依り所というものはないではないか。善も悪も相対的なことにしか過ぎないではないか。行爲の道徳的な標準は人間同志の間にあるのでなく、人間を包み越えたところになければならない。

人が仏に向ったときに、何が悪であり、何が善であるかが明らかにするのである。法然もこの宗教的な立場から、仏の慈悲を説いておられる。仏の立場からみれば、人間の慈悲や善など取るに足らない他愛のないものだし、無慈悲や罪や悪も何かわけがあつてのことであろうと哀れまれるであろう。法然の晩年の言葉と察せられるのが「この宗（浄土宗）は、悪人を手本と爲し善人まで撰するなり。聖道門は善人を手本

ある詩から

働くものの響

大田 敬 光

こんな詩が最近の全日本仏教青年会機関紙に載っているのを紹介したい。

地下鉄のつて足ふまれ

おまいり行つて吠えられて
こわこわ入つておじぎして

仏間に行けばステレオで

お経もろく／＼味えず

家族はテレビで大笑い

帰りのあいさつ相手なく

淋しく女中に見送られ

それでもわたしは幸福と

につこり笑顔でお念仏

(てるてる坊さんてる坊主あした天気にな

あれ)
(大阪市 松本貞竜)

そうして、この詩の作者である若いてるてる坊さんは「どうですか。淋しそうにきこえ

ますか。どうしてけつこう愉快です。一生懸命やつています。」とつけ加えることを忘れなかつた。

このユーモラスな青年僧の詩を読んで、思わず微笑させられる中に、何となくドキリとした人も案外、世の中に少くないと思うがどうであらうか。

東京などあまりしない様であるが、関西、中部地方以西では各寺院の僧が檀家廻りといつて毎月一回位、檀家を訪れ廻向をするのが普通である。従つて寺と檀家とが常に接触しており、その関係も深いといえるが、しかしその反面、以前からの風習としてややもすれば形式的に流れやすく、そこで前述の如き詩が生れるといった次第になる。

伝統を受け継ぐものには絶えず因習と形式がつきまとうものであり、いかにそれらをつ

と為し悪人をも撰するなり。」と説かれている。

親鸞も道德的立場での善惡の一応の通念からことさらに眼を覆うていたのではない。むしろ善を勧め惡を制することに心をを用いなかつたわけではない。或る書簡で、「なによりも聖教の教えをもしらず、また浄土宗のまことのそこをもしらずして、不可思議の放逸無慚のものどものなかに、惡は思うさまにふるまうべしと仰せられそうろうなるこそ、かえすがえすあるべくもそうらわず。」と弟子を誡しめて、これに続いて、凡夫だから当然だといつて、思うままの行いをして盗みや人殺しをしてよいものであらうか。盗み心のある人でも極樂を願ひ念仏を申すようになつたら、その心が次第に消えてゆくはずなのに、「惡くるしからずということ、ゆめゆめあるべからずそうろう」といっているのである。

(『末灯鈔』)

き抜け、本来の面目を次の時代に生き返らすが若き世代の大きな課題となり、悩みとなるのであるが、二千有余年の歴史をもつ仏教集団もその例外ではない。

学校の休暇になると名古屋の一寺院に帰る私自身も前述の詩と同様のことを殆んど毎日経験しているだけに、笑い事ならぬ或る悲壮味をすら感ずるのである。いわゆる進歩的仏教主義者は云うだろう、「旧い封建的色彩をすら含む檀家、寺院制度など廃止してしまえ、そこから真の仏教が生れる」と。

然し、この言葉は一見、魅力的ではあるけれども現実を無視した発言だと思う。真の仏教というけれども、やはりそれを支える基盤は必要であるし、教法を實際化する為の寺院と、檀家との間のある紐帯は必要なものとしてこれからも働かねばならない。つまり、よくいわれることなのだが、簡単なことばでいえば、寺院は寺院としての本来の務めを果し檀信徒は自らの立場を自覚することが大切だと思われる。

この点、最近各地の寺院で毎週或いは毎月、数回づつでも定期的に經典講話会とか念

仏修道の集いなどが開かれるようになり、仏陀の愛と励ましが身近かに受取られる場が次第に多くなりつつあるのは嬉しいことである。無論、大多数の寺院僧侶は眠りこけ、死物化されてしまっているけれども心ある人は自分の檀那寺であろうとなかろうと、活動している寺院には進んで参加し援助することが大切であると思われる。

現に私達の寺でも毎週日曜日には広い意味の浄土教、光明主義の立場から、念仏三昧の集いと「法華経講話」がつづけられているが欠かさずお参りに来られる方々の中には日蓮宗、真宗の方達も、早朝にも拘らず遠くから参会せられている。

が、まだまだ実際の世間では、宗教の必要は叫ばれながら、寺から坊さんが出向いても「仏間に行けばステレオで、お経もろくろく味えず」に無関心であり、月一回程のお参りにも「家族はテレビで大笑い」しているのが実状であろう。つまり毎月のお参りが慢性化し、そこに何の宗教的感動も感じなくなつてしまつたのである。こういう人は一体、礼拝とというような事を何と考えているのだろうか。

○

このようにみてくると、僅が一二の点だけを取り挙げてみても、法然と親鸞との間は今までいろいろに取り沙汰されてきたほどに隔っているのではないことがわかる。一種のセクト主義的な対抗意識から、相手が言ったことはこちらで言いたいことでも強いて言わないようにして、つとめて特殊性を強調しようとしたのであろう。

それが法然を、親鸞を、削ってやせ細らせ、変貌させてしまったのではないか。

これまではこの二人の聖者の一致点をみてきた。それではなにもかも同じか、というと、もちろんそうではない。両者の差異点を見ていかなければならない。

余り長くなるのでそれは他の機会に譲ろう。

(大正大学教授、文学博士)

仏典の中には「法界等流（ほつかいとうる）」という言葉がある。法界とは真理の世界のことであるが、宗教的にいえば仏の恵みを意味し、即ち人生の最高価値であり目的である、永遠の生命と常恆の平和がいつも、知る知らぬによらず、善人、悪人たるを問わず全ての人間の上に等しくふりそそぎ、投げかけられているということであろう。

この仏より廻向（さしむけ）せられた人生の秘義を覚らんが為に、我々には常に心を虚うして聖壇にひざまずく敬虔さが必要なものであり、その機縁となるものが毎月の月参りともなつてあらわれてくるのであると思われる。

単なる封建制度の遺物ではないことは明らかであり、もしそうならとつくの昔に滅び去つていた筈なのだ。人々が無関心になつていくことは、あまりに祖先崇拜に重点を置くあまり、信仰の主体性を失つてしまったことと「無価の宝珠（このうえなき たから）」を心の片すみに蔵い忘れていることに起因するのではあるまいか。

仏（ミオヤ）より廻向（さしむけ）られた

宇宙人生と受取るところにおおらかな詩の世界が生れるのであろう。詩の世界とは無限の創造の境地ということだ。窮屈で退屈さが満ち充ちている今の世界に最も必要なものはこれではなからうか。

「働く人に大事なものは詩だ」第二次世界大戦中にロンドンで病死したフランス生れのユダヤ婦人シモン・ウエールという人の云つたこの言葉に鈴木大拙博士は注目される。

「労働は神聖だと昔はよく云つたものだ、しかしそれよりも次の句の方がよい、「労働者の要するものは必ずしもパンではない。詩の方が大切だ」と。これは自ら労働者となつて機械の奴隷のようになつて働いたウエール女史の体験からの言葉だといひ、同じく「リスはかこの中に閉じこめられて、狭いところぐるぐる走りまわりをつづけておる。いかにも殺風景のようだ。がこの変化のない運動が直ちに無数の天体の無限の宇宙を循環するのに見くらべられる。そうするとそこに両者の間に何やら一脈相通するものがあることに気がつく。このときリスはもはやかこの中にごめく一小動物ではなくなる。彼は直ちに無

限の世界に超出する」という意味の女史の文章に、博士は東洋の娑婆即寂光土という妙境の心を感じ、創造はいつも無限の世界から出てくるといわれる。

宗教こそ違え、フランスのある片いなかへ赴任したカソリックの、信仰に燃える青年司祭が神と村人の中におこるさまざまな人間の葛藤の間に苦悩し疲労の末、遂に胃ガンで倒れる迄をえがいた「田舎司祭の日記」で作者ジョルジュ・ベルナノスは、最後に、この若き司祭をして、「そんなことはどうでもいいのです。すべては恩寵なのです」といわせている。ここでも司祭の生涯は一見、悲劇的であるようにみえる。

千からびた精神の凡庸さの中にある功利的な現代では、ともすれば詩の根元である経典を誦する声はステレオ、テレビの騒音や、茶の間の笑いにかき消されがちである。が、そんな時代だからこそかえつて聖典と、あらゆる人々に対する深い理解と静かな親しみが今日最も必要とされるのではあるまいか。てるてる坊さんの「あした天気になあれ」が無駄な願いにならぬ様、祈りながら。

実話 盲信の家庭

千葉市小仲台の高橋よねさんは新興宗教の熱心な信者であった。同じ信者の家で、何かもめことがあったり、困っていたりするとかなり遠くまで出かけていって相談相手はもとよりの事、更に幹旋にどび廻ったり、時には多少の援助をすることをおしまなかつた。

よねさんの夫忠博さんは信州大学の事務局に勤めていたので、任地の長野に住んでいた

よねさんの苦勞が報いられて信者がふえ、いよいよこれらの人々のリーダー格として、念願の本山詣りに出掛けて行つた。すことは殆んどなかつた。まして朝起きて母

さて本山詣りも無事にすみ、帰宅してみると、そこには千葉県児童相談所からの呼び出し状が待っていた。一瞬よねさんがまっ青になつたのも無理はなかつた。長女真理子ちゃん（園生小学校五年）次男秀夫ちゃん（同三年）次女加寿子ちゃん（同二年）三女洋子ちゃん（同一年）の四人が保護されているという通知であつた。

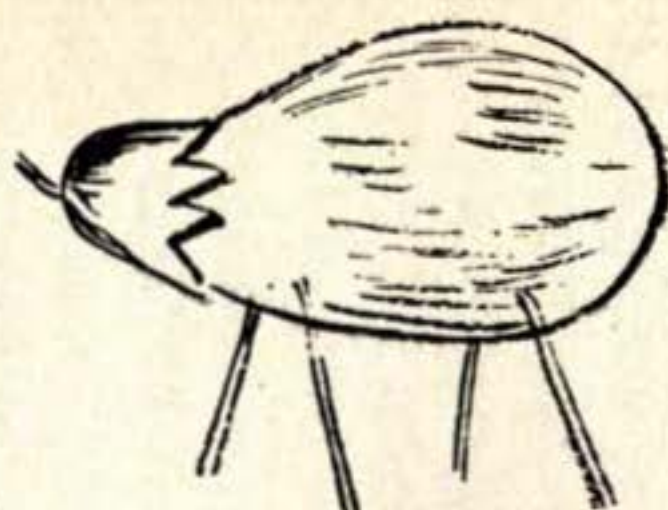
毎月の費用はキッチンと送ってくれるので中流程度の生活を楽しむことができた。それに四十一才という活躍さかりで、身体も丈夫であつたので、世間でいうレジャーブームとやらで、無駄な費用をかけて疲れにゆくような遊山には大反対であつた。それにもまして、よねさんをじつとさせておかなかつたことは、

四人の幼い兄弟たちは、学校が何より好きであつた。授業が終つてからも兄弟が集つて校庭で遊んでいるのが常であつた。もう日が暮れるというのに、何が面白いのか四人して遊んでいる姿に、近所のお母さんたちがお菓子をやりたり、時には夕食に招いてやることすらあつた。

世間が「今に不幸が必ずくる」ことに気がつかず平気で暮していることであつた。よねさんは同信の家を廻ると同時に、新しい信者を獲得するにも熱心であつた。

家に帰つても兄弟たちは、けんか一つせずお互に助け合つて食事がすめば、床をとって睡ってしまった。父親は遠い任地にあるし、母親はいつも信者廻りに忙しく、夜一諸に暮つたのである。

ほとけさまの鈴



おしよらい

おしよらい

ほたる火ゆれて

じじさま ばばさ

ま

ことしも

きやれ

こどもたちの

うたこえにのって お盆のまつりがやってき

ました。

まあ坊は、なすに足やしっぱをつけた馬を
こしらえました。

まあ坊を かわいがってくれたおじいさん
がなくなつてからは おじいさんののつてく

ぬのむら てつや

る馬をつくるのが まあ坊のやくめになつて
いたのであります。

おじいさんの馬は いつも一つでさびしい
ようでありましたので まあ坊は小さい馬を
もう一つつくりました。

やがて おがらのけむりが 夕やみにゆれ
ると てかてかあたまのおじいさんは ゆつ
たり ゆたりと 馬にゆられてみえるのが常
でありました。

ことしは ちょっとおそいようです。

おがらが もえつきようとしたとき 馬の
かげが見えました。にこにこしたいつものお
じいさんであります。

おじいさんの うまのうしろには もう一

つ小さなかけが よりそつておりました。

それはかわいい馬でありましたが びっこ
のようですのよく見ますと足が三本しかあ
りません。まあ坊が もう一本つけるのをわ
すれていたのであります。

三本あしの馬には 一人のこどもがのつて
いました。

この子は だあれ

まあ坊のおともだちだよ

おじいさんが云うと まあ坊とおなじ年ほど
の その子は にっこりしてこつくりをしま
した。

二人はすぐ仲よしになつて げんきにあそ
びましたが ふしぎなことには その子が
とびはねるたんびに きれいな鈴のねがあた
りにながれたのであります。

山にうみに むらにも町にも それはそれ
は美しく ひびきわたつてゆきました。

びょうきでねていたよっちゃん は ふとん
を ビヨン とどけました。

むつつり太郎が 大きなこえで ワハハの
ハ

なまけものの五すけどんが かあさんの肩

を トントコトントン

いじわるこん太は くるまのあとおし ヨ

イトコ ドツコイシヨ

仲のわるい はなちゃんとかず坊が コン

ニチワ

けちんぼごろべえが 赤いはねのほきんに

十円ボーイ

ビーヒヨロ

ビーヒヨロ

ビーヒヨロ

ドン

盆おどりには

たのしい鈴のね

が たかくひく

く ひょうしを

とってくれました

た。

みんなが手をつないで まんまるお月さま

のわをつくると あかるい光になりました

たった一つの鈴のねが こんなにもたくさ

んの人たちを よろこばせてくれたのであり

ます。

星が三つながれると お盆まつりがおわり

ました。

おくり火の中を

おじいさんは その
子をつれてかえって

ゆきました。

つぎの日のあさ

まあ坊の手には き

んいろの鈴が一つの

こつていたのであり

ます。

あの子は ほとけ

さまのくにで たの

しい鈴をこしらえて

せかいじゅうの子ど

もたちに わけてく

れるのにちがいない

と まあ坊はおも

います。

(おわり)

車中のすい客

その時の国電は、まだ夜更けで
もないのに空いていました。後の
車から一人の男、さあ五十前後の
人でしょうか車の動揺ばかりでな
く、相当に酔っているような足ど
りでしたが、両手で拍手をとりな
がら、こちりに参りました。私の
前を通る時、その人が「酒飲むナ
酒飲むナ——」と、ただそれだけ
の文句を繰り返し、繰り返し、例
のヤットン節で、口ずさんでいる
のを知りました。

しばらくすると、また同じ人が
今度は前の車から、こちらに参り
ました。さっきと同じように手拍
手として「酒飲むナ——」を繰り返
しながら、後の車の方にゆきまし
た。恐らく六、七輛ある国電の中
を往復したのでしょう。私たち乗
客たちに迷惑をかけるわけでなし

独りご機嫌で禁酒の宣伝をしてい
るわけですが、ご自身のことを棚
にあげているのが可愛きようで
す。車中の人たちは、ニヤニヤしな
がら見送るばかりで、別して不快
の念をもった様子がありません。
その男が妙な腰つきをしながら、
飄々と歩いてゆくのが、おかしい
ばかりでなく何んとなく、憎めな
いものがただよっていたもので
す。

私は後になって、こう考えまし
た。どんな場合でも、他人に嫌な
思いをさせてはいけないし、また
こちらの心掛けによつて、他人か
ら嫌がれずにすむということだ
す。従つて他人に接するには、ま
ず以て自分の態度に気をつけ、常
に自分の性格を反省してゆくこと
が大切でしょう。さもないればい
かに有益なお話であつても耳に入
らぬことになります。



室^{むろ}の津^つの遊女^{ゆうじよ}

鈴木成元

承元元年（一二〇七）二月十八日、いろいろな事情がからんで、法然上人は土佐の配流が決った。がっかりした弟子達をかえってなぐさめ、親交のあつた九条兼実に別れをつけて、鳥羽から船で出発したのは春まだ浅い三月十六日であつた。

上人は淀川を下り翌日の十七日には経が島につき、さらにその翌日の十八日には高砂を経て室の津についた。この室の津は昔から有名な港であり、瀬戸内海を行き来する船が多かったち寄る港であつた。

「四十八巻伝」によれば、上人の船が室の津につくと遊女をのせた一艘の小舟が近づいて来た。そして遊女は上人に身の上話をし、罪深い私はどうしたら往生出来るかと尋ねた。そこで上人は、ただ本願を信じて念仏することをおねんごろに教えられた。遊女は喜びの涙をかくしきれず、その後は一途に念仏し、臨終正念に往生をしたという。

この話はあまりにも有名で、昔から法然上人の庶民教化の材料として僧侶は勿論のこと、一般在家の人々もよく知つてゐることを思う。

しかし従来語られて来たこの遊女教化の物語は、あまりにも物語の内容そのものを曲解し過ぎてゐるので筆を取つた次第である。つまり、この物語の中に出て来る「遊女」ということと「罪深い身」という言葉の解釈は考へなおさなければならぬ。

遊女という言葉は「吾妻鏡」をはじめとして鎌倉時代の記録にはよく出て来る。しかし、鎌倉時代の遊女というものは、江戸時代以後にいわれる遊女とは全くその意味が違ふのである。法然上人の在世時代の遊女というのは、白拍子とか遊君ともいわれ、遊女職をもつた人である。職ということは給分をもらつてゐるということである。今でいえば俸給をもらつてゐる人のことである。つまり最近まであつた花街の売春婦とは違い、身分



のある立派な職業で、いくらなりたいと思っても簡単になることは出来なかった。彼女達の仕事は、貴族や武士のそばにハベルことであり、今でいえば、社交界の花形であった。だから教養も身分もなければならぬものであった。ところが時代がたつにつれて遊女の意味が変わて来る。江戸時代になると、花魁（おいらん）とか女郎とか飯盛（めしもり）とか区別はしているようであるがこれらをも遊女というようになるのである。

これは一人遊女ばかりではなく、大工でも百姓でもそうである。今大工さんといえは普通の大工さんを指し、頭梁（とうりょう）さんといえは大工の親方をいうようである。けれども昔は全く逆である。大工とは大工職（しき）をもったものをいうのであり、誰でもがなれるものではなかった。今でいえば請負師のようなもので、大工の下には多くの下人達がいた。この多くの下人達の頭が頭梁なのである。それなのに今では頭梁が上になって、デイグなどといわれ大工が下になってしまったのである。百姓もそうである。百姓職を持ったものが百姓といわれるものであるが、今はその下で働く下人達を百姓といい、何か下げすんだ言葉のようになっていくが、とんでもないまちがいである。このような例は他にいくら

でもあり、一人遊女ばかりではないのである。

それはともかくとして、遊女をいやしい者と解釈する原因となったのは、本文に「遊女」とある次に「罪深き身」という言葉があるので間違いが生じてくるのである。なるほど女郎とか飯盛とか淫売婦とかいうものは下品なものとされていた。そして世間からは罪深いものと下げすまれ、自分自身もそのように意識していたに相違ない。

しかしながらここでいう「罪深い」という言葉は法然上人時代の室の遊女のいった言葉であり、江戸時代にいうような職業的な罪の深さをいったものではない。この言葉は、多分に自分を謙遜しないまでも個人的なものをいったのであろう。

そう解釈するのが当然である。

鎌倉時代は非常に身分の厳しい時代であり言葉にしても着物にしても装飾品にしても、分相応にしなければならなかった。早い話が、正座したり、アグラをかいいたり立膝したり、足を伸ばしたりするのは身分によって決っていたのである。庶民は正座したり、アグラをかくことは許されていなかったのである。「四十八巻伝」をみると、女で立膝をしたり、若い男が寝そべったりしながら



上人の説法を聞いている姿などが出て来る。これは一見不思議に思うことであろう。けれども、これが当時の風俗なのである。したくとも出来なかつた庶民の姿なのである。

こういうことを頭に浮かべながら「四十八巻伝」や「拾遺古徳伝」などに画かれている室の津の遊女の姿をみると、遊女がどういう身分であつたか、より一層はつきりすることであろう。「四十八巻伝」は屋根のついた立派な船に乗り、多くの武士に護られている法然上人のもとへ、「拾遺古徳伝」は岸の家屋で僧侶や武士や女などに説法している上人のもとへ、それぞれ構図は異なるけれども、どちらも小船に乗った遊女が、尋ねて来るところが画かれている。その時の遊女の様子はどうかであろう。

侍女に日傘をささせもう一人の侍女が船をこいでいるのである。しかし同じ女でありながら、三人とも着物が異っているのである。勿論遊女は一見してわかることと思うが、宮中などに出入りする宮女の姿と全く異なる。いやそれよりもピラピラのついた傘をさして上人のもとに来るのである。これは身分がなければ当然出来ないことである。

それなのに従来語られている物語は、罪深いという言葉葉にとらわれて、高貴な遊女をも、身分のいやしい下品な江戸時代の売春婦におとしめてしまっているのである。なるほど誰でもが救われる布教面からいうなら大きな収穫かもしれない。

しかし事實は大きなミスである。

「四十八巻伝」や「拾遺古徳伝」が江戸時代に作られているなら、また問題は別になるけれども、これらの絵巻は鎌倉時代の末期に出来ているから、風俗はすべて鎌倉時代のものを伝えていることは明らかである。その絵巻にこのように描写され、しかも世間に発表されているものだけに間違いはないであろう。

法然上人在世時代にも江戸時代に遊女といわれるような身分の低い下品な売春婦はいたであろう。室の津が港町であるだけに、花街ばかりでなく、小舟に乗って、碇泊している船を廻って行くものも十分考えられることである。

しかし「四十八巻伝」などに出て来る遊女が、従来語りつがれているように、身分の低いものではなく、立派な位をもった人であつたということは鎌倉時代の社会を考えれば、絵を見なくとも十分理解出来ると思う。

扉の御法語

念仏申す者を極楽に往生させる
と仏さまが誓っておられるのです

それでも仏さまを疑いお念仏申せ
ないなら、それこそ縁なき人々と

申す外はありません。阿弥陀さま
の本願は唯一無二の絶対でありま

す。従って第二次的のもの、助太
刀となるべきものは、何等そこに

介入する余地がないわけでありま
す。また手伝ってもらふ必要がな

いのであります。

御法語は更にこれを説明して

「すけといふは、智慧をもすけに

さし、持戒をもすけにさし、道心

をもすけにさし、慈悲をもすけに

さすなり、善人は善ながら念仏し

悪人は悪人ながら念仏して、ただ

むまれつきのままにて念仏する人

を念仏にすけさぬとは云也。さ

りながら悪をあらため、善人とな

りて念仏せん人は、仏の御心に叶

べし。かなはぬ物ゆへに、とあら
んかくあらんと思て、決定心おこ

らぬ人は、往生不定の人なるべ
し」とあります。

こうした御法語は、いたる所で
繰り返されています。例えば「深

重の本願と申すは、善惡をへだて
ず持戒破戒をきらはず、在家出家

をもえらばず、有智無智をも論ぜ
ず云々」とある如くであります。

また「智者の念仏と愚者の念仏と」

「心のすむ時の念仏と妄心の中の

念仏と」「聖人の申す念仏と在家

のものの申す念仏と」何れも功德

等しく、何らの差別のないことを

申されているのも、このことであ

ります。

このように上人が、機会ある毎

に同じことを教えられているのは

日常生活のもととなる大切なこと

だからであります。むかし一日一

のであります。しかし学問にしろ
慈悲にしろ、僅かばかりの善いこ

とをすると、すぐに慢心し、他を
さげすみます。仏さまの目からみ

れば人間の努力や慈悲心は極く小
さなものに過ぎません。

ものの事に徹するという言葉があ
りますが、上人の御信仰を一言に

していい表わされた御法語として
この御法語ですべてがよい表わさ

れています。

またこの御法語を拝しても、上

人は釈尊の再来であつたという確

信がもてます。なるほど宗義では

八相相承とか六相相承とか申して

いますし上人自らも専ら善導大師

のお導きによると、あくまで御自

分の発見ということをしていてい

ます。しかし上人は、それまでにあ

った仏教の実践をすべて捨てられ

たのです。つまり上人は仏教のあ

らゆる部門を学ばれましたが、そ
の結果

「ここにわがごときは、すでに戒
定慧の三学のうつはものにあらず

この三学の外にわが心に相応する
法門ありや、わが身にたへたる修

行やあると、よろづの智者にもと
め、もろもろの学者にとぶらひし

に、おしゆる人もなく、しめすと
もがらもなし」

と、遂に御自身の満足が得られ

ませんでした。上人はあらゆる経

典と学者について勉強され、参籠

され遂に救われなかつたことは、

釈尊が先達に学び、苦行して遂に

解脱を得られなかつたことと似て

います。そして上人は、「なげき

なげき経蔵にいり、かなしみかな

しみ聖教」に向われ、善導大師の

お導きにより浄土宗を開かれまし

た。

冥官でない私に
毎晩あらわれた

天津の女ゆうれい

吉岡義豊

「ホー、あなたはみたのかね」

いつも小さなひととなつこい眼の役僧の中田氏、このときばかりはその象のような眼を大きく見開いてジットわたしの顔をみつめた。

「ぼくはみたことはないが、この近所では高野山別院に女ゆうれいがでる、ともつばらのうわさですよ」

「なーんだ、そんなうわさがあつたのかね。それならなにも気をつかうことはなかった」わたしはとたんに安心したのか、はりつめていた気がゆるんで、この幾月かの緊張が、胸の中でガラッガラッと音を立てて崩れてゆく様にさえおもえた。はなしはこうである。

昭和十六年七月、二年間の外務省留学期間が終ったとき、知人の興亜院華北連絡部の

日本の威勢のよいときでもあつたから、常時二千数百名の学生をもっていて、日本語学校としてはよく知られていた。

文化担当事務官から、その傘下にある天津の日本語学校の教務主任にどうか、と相談があつた。さしあたって何とか考えなくてはならなかつたので、しばらく天津の空気を吸うことも悪くはないだろうと承知した。書物などは北京から内地に郵送したので、身軽に天津に越した。宿舎はかねて北京で吉井芳純主監の了解を得てあつたので高野山別院の一室とさきまつた。そこは明石街で、道をはさんだ向い側には天津日本軍司令官邸、その向う隣りが日本語学校の本部であつたから、宿舎から学校までは歩いて二分間。怠け者には勿体ないような条件であつた。この日本語学校は本部所在のをふくめて、天津市内に六校を開設していた。実用日本語の学習を中心に當時は

高野山別院は借家（家主は王輯唐居士ときいていた）で、煉瓦づくりの三階建。左右に二部屋づつ、中央が階段になっていた。すなわち一二階は階段の左右に同じつくりで二部屋づつ、三階は一部屋だけで、いささかの屋上といった格好。正確には二階半と勘定した方がよいのかも知れない。一階は入口から向つて右側が食堂と休憩室。左側は手前が中国人ボーイの居室、奥が物置。二階は食堂・休憩室の上にあたる二室が本堂、狭い廊下をはさんで反対側が居室。この別院の常住者は、わたしを加えて三人。わたしよりすこし年長の役僧の中田氏。やつと十五六歳の中国人ボーイ、彼が調理人兼雑役であつた。考えてみれば殺風景な世帯であるが、当時別院に気にもしなかつた。中田氏は三階の一室を使用していた。わたしの二階の部屋は洋室づくり。一部屋の広さ約十畳。廊下からドアをあけると部屋。この部屋に入ると更にドアで仕切つた同じ広さの一部屋が右奥につづく。この奥

の部屋は畳がしいてあったし、かねて了解を得てあったのもこの部屋だから、ここを借用した。同じようなつくりになっていたうしろどりの建物と向い合つて、小さな窓があるだけで、ほとんど太陽の射すことはない。

何だか陰気な部屋であった。それでもこの建物では一番よい部屋となっていた。どうせねるだけだし、日があたろうがあたるまいが気にはならなかった。南京虫はいないときいてむしろよろこんだ。部屋は隣家に向いた方に小窓、その反対側がドア、あとは全部白壁小さな机とスタンド、若干冊の書籍と夜具一式。これがあるじと共にこの部屋を形成するすべてであった。

就職も生れてはじめて、日本語学校も未経験。加えて学校の性格上、八十パーセントは夜学生、熱心？な教務主任であったから、夜学授業を一巡するのに二月あまりかかった。その頃は夜おそくつかれた体を宿舎に運びこむのがやっとであった。いつのころからか、記憶はたしかでないが、寝苦しくて仕方がない。朝になつてもつかれがとれない。とにかく、調子がおかしいことを意識するようにな

ったのは、移り住んで数か月を経過したところすなわち、劇的な大東亜戦争に真向いの司令官邸が鋼鉄のように緊張したところからだったとおもう。最初はなれない仕事のつかれかと考えたが、かれこれ一か月を経過しても一向に気分が快適にならない。かえつて気だるさがましつたようにおもう。診察をすすめられた

が、元来健康には自信があったし、特に思いあたるふしもないので、そのまますぎた。年が改まつて大東亜戦争の輝く戦果が毎日のニュースをにぎわしていた十七年二月ごろ。さすがに鈍感なわたしも、何だが夜中に極度になされて、そのために変調をきたしているらしいことに感づいた。うなされているせいだとわかつてくると、あの部屋にねることがいい気持ではない。よるともなると憂うつにさえなる。その上、中田氏と中国人ボーイは夜の遊歩に家をあけることが多かったらしいから、夜中の一時二時ごろまで、この寂涼たる建物に廊下をへだてて、本尊さまとお骨とわたしだけが留守居させられていたことも、このころになるとわかつてきた。とはいえ、わたしも男のはしくれ、あまつさえ出家僧侶

の身。もののけに怖れた、とあつては外聞がわるい。と、とんでもないところに意地をはって、なおしばらく成りゆきをみることを心ひそかに決意した。

うなされる時刻は、ほぼ夜中の二時すぎから三時前後であるらしい。というのは、わたしがねむるのは一時ごろであるから、それから、ややあつてうなされはじめる。二百キロから三百キロの重い石を胸の上にのせられたような名状しがたい苦しみ。それがどのくらいつづくのか。急にフワッと解放されたようにわれに返るのがかれこれ三時半。胸にはまだ重圧の余感がある。夜明けまではほとんどねむれない。こういう状態が何か月もつづくといいてい睡眠不足。それでもわたしは我慢した。布団の上からわたしをおさえて苦しめるものの実体をつきとめようと考えた。うなされかたがひどいのと、大体きまつた時間なので、いつかはその実体がつかめるような気がした。

天津の二月はまだ寒い。天井の高いひえびえとした部屋。わたしは廊下の入口のドアも奥の寝室のドアもキッチンと閉めて何時ものよ

うに布団にもぐりこむ。亀の子のように首だけ出して枕元のスタンドで一時ごろまで本をよくむ。と、自然に睡魔がおそって文字がかすむ。習慣でスタンドを消す。しばらくするときまったようにうなされる。この筋書はこのごろの日課、いや晩課なのである。そこでわたしはもっとも原始的な考え方をした。読書つかれ、ねむる。これは人体の生理的な自然のコースである。そこをものけがおそってくる。これは非合理的な不自然である。自然のコースを無為にくり返しては、不自然の因を除去することができない。不自然に対しては不自然な方法で対する以外にない、ということである。不自然な方法というのはこうだ。ものけが襲った時に枕元のスタンドを、機を失せずにつけることである。簡単なようだが至難なことである。襲われている最中は、体中が金しぼりの術におち入ったように自由がきかない。意識もゆめとうつつの境界に朦朧（もうろう）としている。すでに五体の自由を得たときは後の祭だからである。しかしながら回をかさねるにしたがって、ものけは頓馬なお得意様ということ、いく

らかなれなれしくなり、警戒心をゆるめたのかも知れない。一方、わたしの方はそれに比例して熟練工になりつつあった。トレーニングというものはおそろしい。うなされるときは、いきなり胸の上をおさえつけない。何だか足の方からきて胸をおさえ、終るとまた足の方からスットゆくような気がした。スタンドに手をやることは何時も失敗したが、それでもこの程度の漠とした意識は心の底に残るようになったので、もう一息だと考えた。寝るときは体の位置、手とスタンドの距離、どうすれば秒速を争うはやさで点灯できるか、など細心の工夫をした。にもかかわらず毎夜のような失敗の後で、遂にわたしとものけにとって最後の夜がきた。

この夜はつかれていたせいだ。読書から睡眠にうつる時間が何時もよりはやかだった。十二時前に消灯した。ものけはおそらくわたしがひとねいりしたことには気がつかないでいつものように足の方から気配がした。わたしは熟睡後の習慣的に目さめる一歩手前でウツラウツラしていたらしい。無意識だろうがとにかく変調を感じた。まてまてせいては事

をしそんじると、スタンドとの間合いをはかり呼吸をころした。あにはからんや、次の瞬間、わたしの体は盤石でおさえられたように微動もできない。息がつまりそうだ。ギューギューしめつける。手も足もしびれたように自由がきかない。唸っているつもりだが声にはならない。どれほどの時間だったろう。永いようにも思えたし、短かいようでもあった。息の根がとまるかと思われた一瞬、渾身の力で体を動かした。同時にスタンドをおした。フワッと布団が軽くなった。パット部屋があかるくなった。ドアの隅の壁に向って若い女の後姿らしいものがかき消されるように消えた。ほとんど同時の瞬間のことであった。首から上と腰から下は記憶にない。後姿は背中あたり、特に大きくお太鼓に結んだ黄色っぽい帯と、緑と薄エビ茶にみえた矢絣模様の着物の色だけが未だに眼にのこる。後姿から察すると、二十歳前後のもちろん日本の娘さんである。夢かうつつか、火花が散ったような瞬間のことであった。真とも仮とも断定はできない。が、意識はすでにハッキリしていた。背筋を寒いものが走って体中の血

が一時に凍る思いがした。

翌朝、わたしははじめて役僧の中田氏に、このことを話した。実は体のつかれ、気のまよい、と一笑に附されるのを心配しながら。このときまで、わたしはうなされていたことなど一言もしゃべってなかった。しかし昨夜のことはまるで夢中のこととは思えない自信めいたものがあつたので思いきって話す気になった。

「ホー、あなたはみたのかね」

これが最初に役僧氏の口からでた言葉である。わたしが近所のうわさを知っていたのな

らともかく、全然白紙で経験したことが、またま街の風聞を裏付ける結果となつた。幽鬼（ゆうれい）と出会う数か月間、われながら辛棒したものだとおもう。この夜から奥の間に寝ることをやめて、手前の部屋にかえた。四月中旬、天津を引きあげてふたたび北京で暮すようになるまで、約一か月半起居した。があ夜かぎり女鬼（おんなゆうれい）はあらわれなかった。かの女鬼は何かたのみことがあつた、のかも知れない。未熟なわたしには通じなかった。中国では、よく生きながら冥界の役人となつて、昼間はこの世の仕

事をし、夜は冥界の職務についた話が伝えられている。もしかの女鬼を介して昼は教務主任、夜は冥官となつていたらわたしの中国留学は錦上添花を添えたかも知れない。人は生きているときには年を加えるが、死後は逆に年を減少して零歳に至るとまた生れかわる、という説がある。二十歳前後とみかけたかの女鬼は、あれから丁度二十年、あるいは今ごろどこかに転生しているかも知れない。もしも転生しているのなら彼女の新生に幸福を祈りたい。

表紙の写真……荻原弘志氏撮影

大船の観音さま

大船駅を毎日のように通る人でも、列車が駅に近ずくと、必ず車窓から観音さまを仰ぎ見る。それだけに誰にも親しまれ、また誰にでも慈顔を拜せておられるのが、この大船の観音さまである。

昭和の初期に、頭山満、小笠原長生両氏

が護国祈願を旗じるしに、この観音さま建立を発願し、凡その外かくが出来上つた。材料はコンクリートである。

それがそのままになっていたのを、未完成的のままではもったいないと、安藤正純、後藤慶太両氏が発起人となり、芸大の山本豊一教授の手によって今のように完成することができた。その費用七百万円、一昨年の秋に完成してから夜間は照明によって大空にくっきり慈顔が浮び上る。

そんな馬鹿なことが、案外迷信家だな、と冷笑するものには、わたしは夢中間答として語りすてたい。学生時代に師僧の荒谷実乗師（昨年まで紀州根来寺座主、現在河内に退隠）から、琵琶湖北岸の大崎で、青年時代に求聞持法を修したときに、同じく幽鬼の奇蹟に遭遇した話を聞いたことがある。若き日の師の体験話として興をおぼえたが、殊に天津の経験以来、説明のできない心靈現象を否定する気にはなれない。幽明一如を体得した悟道者ならともかく、煩惱具足の凡夫には、わからないことばかりである。

（文学博士）



近代高僧伝

野上運海

大橋 俊雄

静かな瀬戸の内海に面した赤穂の町に、運海が野上源太夫の三男として生れたのは、文政十二年三月十一日のことであつた。しかし父母の慈愛の目なごしにまもられて生活した、平安の日々も余りつづかず、天保八年には、父を失い、悲しみのあまり花岳院に入つて出家しようとなされた。花岳院は曾つての赤穂城主で、忠臣蔵でその名をはせた浅野氏の香花院であり、また大石家の菩提寺でもあつた。いざ出家と心にきめて寺門をくぐつたが時の住職大巧如拙はねんごろにさとし、「野上家の菩提寺は大蓮寺であり、父の靈をとむらう殊勝なお心をもっているならば尚更

ら大蓮寺に行つて出家なさるがいい」ということで、同年十月大蓮寺の法誉観良について得度し、名も禪苗と改めた時に未だ九歳というかわい頃のこと、彼は生れながらにして聰敏であつたが、幼少の頃抱瘡にかかり、そのあとがお顔にのこつてジャギであり、また學問を好んだことが強く出家したい出家させたといふ心となつてあらわれたのであつた。このきずあとを後々まで常に氣になされたらしく、お歩きの時には、いつも下向きになつておられ、雨降りとか、炎天の時などには、此れ幸いと傘で顔をかくすようにしておられたといふことである。

その後、天保十一年には江戸におもむき増上寺の学寮主戒麟について勉強し、更に東叡山浄名律院の当代きつての学僧といわれた懸澄について三大部を究め、再度入洛して東山一心院の雷雨に天台を智積院隆謙の門を叩いて俱舍唯識をききもしたが、彼が最も熱心に究めたものは天台学であつた。安政六年には名を運海と改め芝西久保大養寺に住し、慶応元年増上寺新谷学寮の寮主となつたが、時偶々故国赤穂では兄鹿之助が暗殺されるという事件がおこつた。事件は家老森主悦の用人村上真輔という赤穂藩の中心人物を軽輩十三人が、藩の疲弊を嘆じ、財政の立てなおしをしたいといふ藩政改革の意図をもつていたにも拘らず、入れられなかつたために、彼等を葬り去ろうとする計画を立てたことに原因があつた。偶々これを耳にした鹿之助は軽輩等を自宅に招き、斬殺によつて事を処することはよくない。もっと他の穩便な方法で革新すべきであると極力説いたけれども、頑として耳を傾けず、野上宅から二手に分れて出発、森村上の兩人は斬殺されてしまった。時に文久元年十二月のことであつた。だが鹿之助の家

から出発した以上は、直接下手人でないといえ同志とみなされ、五年後の慶応三年四月村上一派のために暗殺された。十三人の内七人は既になくなり、残った六人が明治四年二月藩主森家の廟所守護を命ぜられ、高野山麓黒石峠にさしかかった時村上方のために皆殺しにあい、これが我国最後の仇討といわれるが、鹿之助の残された遺児勇三郎と滝三も悲憤やるせなく、村上一派の仇討に刺激され、仇討を誓ったが、叔父運海にさとされ思いとどまったという。

明治五年二月には、周防柳井の瑞相寺に転じた。瑞相寺は藩主吉川氏の香花院で、周防きつての名刹であった。初代藩主吉川広家は関ヶ原役の後ち柳井に入り、築城を企てたけれども、地理的条件にめぐまれなかったため岩国に城を移すことに意を決し、岩国城完成まで此の寺に住していた。当時起居した部屋が庫裡の一番奥まったところに現存し、これを「御成りの間」と呼んでいる。運海はここに居る事十年、同十四年には境雄山にあとを譲って引退したが、廃仏毀釈の関係で世が動揺していたことが原因して雄山は還俗したため

同二十年再度請われて再住し、山口大教会々長並びに浄土宗学山口支校長を兼ねるに至った。ここでの彼は日没の勤行がすむと御成りの間に入り御書見するのが常で、その間行燈の火の上に一合徳利をつるし、御書見が終ると其の間にあたたまったお酒を召しあがってはお休みになるという、無駄のない日常生活をすごしていたという。二十三年には一時浄土宗学本校専門科教授として迎えられ、宗乗及び天台三大部を講じたこともあったが、翌二十四年七月には、一宗の公選により増上寺七十五世の法主に晋董、ついで二十九年五月には大僧正にすすみ、その八月には知恩院七十八世の法燈を継いで知恩院門跡・浄土宗管長になった。

知恩院での在任は、僅かに七カ年ではあったが、それは偶々門末会が阿弥陀堂の再建を決議した頃で、時に彼は「全国を巡化して阿弥陀仏殿の建築をするという、これより大きな事業はない。というのは堂宇の再建というよりも、これを機縁として全国有縁の人々に接し、化益することができからである」と申され、喜んで巡化におもむかれたけれども

何としても老齢、意気はあっても思うようにはならない。それでも日課念仏七万遍は廃することなく、三十五年四月には老の身なるが故に辞山し鞍馬口の上善寺に隠棲してしまった。以来礼仏誦經の外余事を談せず、称名念仏おこたることなくつとめたが、三十七年春宿痼再発し、十二月二十一日澡浴浄衣し端座称名禪定に入るがごとく、世寿七十六歳をもつて遷化せられた。法名を到蓮社竟譽上人任阿無功用運海大和尚という。

師は大柄な方で、極めて温和な枯淡の風格をもち日常儉素を旨としていた。また兄鹿之助の没後一家の困窮しているのを見るにみかね、一族を引きとって世話をなされた花岳寺の琢成仙珪には常に敬意を払い、時折物品をおくっていたようで、今に花岳寺には運海から仙涯に宛てた「野上家ノ今日ニ存スルハ全ク尊師御配心ト御寺ノ御蔭ニ依ル事明了ニ御座候」という消息が残されている。晩年柳井に赴き、又赤穂に帰られた時の如き、「生き仏さまが帰られた」といって近在近郷の善男善女が雲集したと言われるほど彼の高德は多くの人達の尊敬のまゝであった。

東西の庶民氣質を語る

落語のあれこれ

吉 田 雅 男

「京都は日本人のふる里、京都の味は日本の味である。」という言葉がありますが、京都を訪れる東京人の実感も、過ぎし日本の姿がそこにあるという、母の手元にある様な落ち着きを得るというところにある様です。まして浄土宗徒にとつては、そこは祖廟の地でありますから尚更ではないでしょうか。

ところで、その味に対する受け取り方が、東と西では往々にして異なるというよりも逆である場合が多いのです。例えば言葉にしても、関西弁はヨウカンの味、関東弁は塩せんべいの味だといった人がありますが、たしかに関西弁はアクセントが弱く曖昧に聞えますが、関東弁はアクセントが強く歯切れのよいのが特徴です。ですから東京弁は、「ペランメエ・隅田川の水で生湯を使ったおあにいさんだ」という工合にタンカを切るにはもってこいですし、京言葉は、「加茂川の水で顔を洗っていはるから、こんなにぬける様に色白になるのだすエ」という工合に、商談や、お色気ばなしには余韻があつて大変向いている事になります。

さて、東京者が関西へ行つて一番困るのは道を尋ねる時です、といつて不親切というのではなく、かえつて手をとる様に教えてくれているのですが、「この道を東へ行きはつて、上つて、下つて西へお曲りやして……」とくるのでさっぱり判からない事になります。よそもの



棚経と母

お坊さんは音もなくといいたい程にスーッとお仏壇の前にゆき、おローソクとお線香をあげると、座りながらもうお経が始る。棚経のお坊さんを迎えるには、まことにタイムिंगが大切である。お坊さんがみえると、母が接待役で「お暑いところを遠方まで……」と挨拶をするが、お坊さんはもちろん仏壇に向つたままなので、背にお辞儀することになる。やがてお経が始まると、母は団扇でお坊さんを扇ぐが、しかし母の注意は台所のことに向いている。何故なら妻が早くお茶の用意をして、お経の終らぬ内に出すかどうか、またお菓子を添えるように気をきかすかが心配だったからである。

妻にしてみれば、手早くお茶とお菓子を用意して、母のそばに持ってゆかないことには

は方角を云われても、それをのみ込んでい
せんからどうしてもピンと来ません。そこで
「それでは、そこを右へ折れるのですね、そ
れから左へ行つて……」という様に聞返す
ということになってしまいます。京都の町筋

は、東京の様にむやみやたらと曲りくねっ
てはいませんし、碁盤の目の様に整然として
ますから、土地の人にとっては方角ほど正確
なものはないわけですが、東京者というのは
自分の住んでいる場所から銀座がどの方角に
あるかさえ、すらすらとは出ては来ないで
「あっちの方、こっちの方……」程度ですまし
て居るのですから尚更です。そこで、東京の
人間が道を教える時には、「この道をまっす
ぐ行つて、二つ目の十字路を右へ曲つて二、
三丁行くと道が二股になった所へ出ますから
確かそこを左へ行つた辺りだと思いますが、そ
の辺で聞いてもらんなさい。」ということにな
ります。そしてその近所へ行つて聞くと、
「サア判りませんな、この先へ行くと交番
がありますからそこでお聞きになった方が良
いでしょう」というわけで、一切交番まかせ
ということになります、ところが、だだっ

広くて、しかもゴタゴタと家が建て込んでい
ますから、その交番を捜すのに一苦勞という
わけで、地方の人にとっては全く不親切で東
京者は教え方がゾンザイだといわれる事にな
ってしまいます。

話はもとにもどりますが、よく東京生れの
人にはふる里がないといひます。ふる里とは
その人が生れた土地をさし、また、その地
方だけにある山や海のたたづまいや食べもの
と、そこにつながらる思い出の場所のことだ
という様に考えれば、日本中とはより、世界
中から雑多に人が集つたり、遠くは、フラン
ス、イタリア等の西洋料理から、北京、広東
等の支那料理、はては、関西料理、東北料理
長崎チャンポンから博多の水たき等と何でも
揃つて居り、山や海どころか空も見えない東
京では地方色のありようがなく、そうした意
味でのふる里はない様に思えます。しかし、
江戸時代から連綿と伝わった、江戸人情は、
下町気質として今も受け継がれています。銀
座はよそ行きの町で、氣質のかけらも見出だ
せませんが、浅草、上野となれば、着流しに
下駄ばきの風情が似合います。そこには、寄

後になつて母のご機嫌を直すのが大變であ
る。いつかのように帰りかけるお坊さんを追
いかけて玄關さきでお茶をすすめた時の母さ
んの顔、まったく妻にしてみれば、仲々の氣
苦勞というものである。

私は年に一度の、しかもわずか数分間の家
庭劇をみて、心からの満足を憶えるのであ
る。この家は、私の両親がこの地に建てた
めもあつて、益棚にお飾りをしてお精霊さま
を祭るようになったのは、父が亡くなった翌
年からである。父も母も内向的な性格なので
どこがどうなつて仲が悪くなったのか、私に
はよく判らなかつたが、何んとなくお互に氣
に入らぬ相手であつたらしい。これといつて
特別な才能のなかつた父は、家に帰つてから
よく不氣嫌なことがあつた。勤め先の問題を
家にまで持ち込んでくること、母にとって
我慢のならないことで、つい「男らしくもな
い」という愚ちとなつた。

派手な喧嘩こそしなかつたが、二日も三日
もお互に口もきかずにいられると、子供にと
つてこれ以上迷惑なことではない。物心がつい
てからの私が、こうした両親の不和を知り、

席の「鈴本」、講談常席「本牧亭」、安来節の「木馬館」という様な、東京の下町ムードを感じさせる場所が並んでいます。江戸庶民の時代から愛されていたものの一つは矢張り落語でしょう。

落語の歴史をひもといてみますと、本格的な江戸落語の祖は、落語中興の祖といわれている立川談洲楼焉馬だといえますが、この焉馬が、向島の武蔵屋権三方で、落し噺の会を開いて好評を博したのは天明の頃のことです。ところが、それより百五十年前の寛永時代に京都に平林平太夫（安楽庵策伝）という人があって、この人は曾呂利新左衛門と親交があり、同席してよく豊太閤秀吉の御前で即席噺をやった事もあったといわれますが、この人の著述が「醒睡笑」八巻で、これは小噺を集めたもので、現在の落語家も多くマクラに使っておりますから、この人こそ落語家の鼻祖だといえます。ですから、現在は関西よりも華やかで、江戸の味を今に伝え、本場は東京だといえる落語のふる里は、矢張り京都であり、それが江戸の水にあって花咲いたのだといえましょう。

この策伝に続くのが、京都の露の五郎兵衛大坂の米沢彦八、江戸の鹿野武左衛門の三人ですが、ともに元禄の頃の人で、いわゆる辻噺を演じたわけですから、大衆に始めて落し噺を紹介したのは、この三人というわけです。この三巨頭が世を去って数年を経て現われたのが、先に挙げた立川談洲楼焉馬という事になるわけですが、京に生れていながら落し噺しが江戸で育って現在の落語の隆盛を築き、関西ではそれが、ニワカとなり、漫才と姿を変えたのは、矢張り庶民の氣質の違いが原因となっているといえましょう。東と西の持つ各々の氣質をとり入れて出来ている噺が円喬、文治等のだし物である「京見物」です。江戸っ子が三人で初上りして京都に着きホッと一息入れ、宿を定めます。そこで、翌日から京見物を始めましたが、なにしろ若者揃いと来ていますから、毎晩遊びに出かけて半月ばかりで三人共に一文なしとなってしまいます。京都という所は観光と遊びで金を使うのには誠に便利に出来ているのは今も昔も変らぬ様で、まして宵越しの金を持たないことを誇りにしている江戸の若い衆が、「おい

どうにもならぬ憂うつな毎を送らねばならなかった。友達の家遊びに行つて、子供たちの騒ぎの中に親が顔を出し、一緒になって笑い興じる姿をみて、私としてどの位友達の家を羨んだかわからない。

私が酒に強くなり、外での遊びが多くなったのも、自分では家が淋しいからだと思ひにしていた。しかしいくら外で刺戟を求め時間を費しても、やはり家庭は別である。何んとかなく足が家の方に向かないまま、外にいることは決して面白いことでない。ある時には酒に酔つて、かなり夜更けて帰ったこともあった。しかしそんな時、両親とも叱言一ついうわけでなし、事實は二人とも私の帰りを内心案じて待っていたのに、ただ黙りこんでいた。私もこっそり床にもぐり込むのだが、こんな時いい知れぬ寂さに独り泣いたことすらあった。

父が亡くなってから、嫌な相手がなくなつたためか、母の性格が変わつたように見受けられた。母の口数が多くなり女らしい優しさが気づくようになり、たしかに明るくなってきた。その内追憶の中の父の姿が美化されてき

でやす」と柔らかに持ちかけられてたまりません。そこで一人だけが伯父の家へ引き取られて、二人はそこで金を借りて這々の体で江戸へ帰ってしまいます。さて残った男が、伯父とその友人と三人連れで祇園祭を見物に行き、梅村屋へよって散財しますが、そこで京都人と江戸っ子が夫々自慢話が始まります。伯父が祇園会の鉾の説明をしながら囃子の物真似をすれば、江戸っ子も負けていずに江戸の祭礼の囃子を真似します。祇園会の鉾はゆっくりと廻りますが、江戸の祭礼の神輿は意勢よくあばれ廻ります。こうした所にも逆な場面が出て来ます。また、京の男は紫宸殿のお砂を握ると瘡が落ちるといえば、江戸っ子は、「ペラボー奴、江戸へ来てお城の砂利を握つて見な、首が落ちらア」とタンカを切ります。全く江戸っ子の見えっ張り、こういう風に話が大きくなるものです。さて、そうこうするうちに芸妓を呼ぶことになりますが、その芸妓が名さえ（およく）という恐ろしく欲張った女で、客の商売を聞いては何かねだるので有名な女なのです。そこは客の方でも心得たもので、何もねだられぬ様に

「飛脚屋だ」と答えますと、「手紙をただで届けてくれ」と頼みます。また「石屋だ」といえば、「年回だから、石塔を一本寄附してくれ」と無心します。そこで、呆れ返った江戸っ子が「オレはオンボウだ」「アアそんなら私が死んだら、ただで焼いておくんなはれ」で落ちになります。最近の「がめついい奴」や「がしんたれ」に見られる関西気質もなかなか歴史の古いものであり、江戸っ子気質も矢張り風土に芽生えたものでしょう。

各々に地方の味を持ち、異った気質を持ち異った生活を送っている人々が一堂に会し同音の念仏に和合する時、法然上人七百五十年御遠忌に際しての報恩となりその念仏こそ、浄土宗徒すべてにとっての心のふる里でありましょう。

西の笑いにはじまり東の笑いとして受け継がれた落語の味は、西も東も共に身の内に同化した笑いとなって本当の庶民芸術になり得たのです。

西の味も東の味も常に理解し合って、七百五十一年へと念仏求道の道を共に歩こうではありませんか。



たのであろうか。母の脳裡にはたのしみであった父だけが生きているようになった。

そのため仏壇はいつかきれいになり、お菓子が供えられ、いつもお線香があげられていた。母も今は年老いてしまった。お盆に

なってお飾りをするのにも、年に一度父を迎える喜びが、たしかに感ぜられた。今日は棚経のお坊さんがくるとなると、朝から嬉しうにして待っている。いつもお坊さんは暑い午さがりに廻ってくるので、私等は氷水一杯をとと思うのだが、母は熱いお茶でないと気がすまないらしく、炭火に鉄瓶をかけておく。

やがて子供たちが学校から帰ってくる。いつもなら早速戸棚の中に首をつつ込むところを、その日はかりは、こんもり盛ったおはぎが待っている。子供も騒がない。母が孫たちを相手におはぎを分けてやっている姿をみると、私は初めて母の幸福をみるようで、家中の円満さを喜ばずにはいられなかった。

お盆を迎えて



——そのいわれ——

佐藤良智

梅雨空がからりと晴れて
生気がはつらつとみなぎる
七月の天地をむかえると
やがて「お盆」だ。

濃い緑りは強い太陽に
きらきらと輝やいて
あだかも如来さまの力がどっしりと
人間の世界に根を下しているように
宇宙の力が地上のあらゆるものを通して
内から生きづいていようだ
この時に「お盆」だ。

ご先祖さまが
きゆうりや、なすびのうまにまたがって

しばらくの間

なつかしいかつてのわが家にお帰りだ。

自分の血を分けた

自分のあとをうけついでいる

子供やまこや

そしてひまこや

そして、づつと下つての子孫達が

どんなに健やかに

どんなに力一杯に

たくましい生活力をからだ中にみなぎらせ

すばらしい生き方をしているかを知りたい

と。

そして

平和な家庭が

信心深い主人と主婦によつていとなまれ

明るくて健やかな親思いのこども達が

歓喜の花びらをふりまいて

家中が極楽のようなすがたをみとどけに

そのありさまが極楽から想像していた通

りなのに

先祖さま達のよろこびようは格別だ。

どうかよろこんで下さい

ご先祖さま

私どもは精一杯働いています

どんな苦しみがあっても

どんな悲しみがあっても

耐えてゆきます。

欲ばらず

足ることを知り

うそを言わず

他人の悪口を言はず

至らない点を反省し

つまづくことがあったら

ここからさんげし

こころを浄め

こころの奥底までくさらせないよう

おねんぶつを申して

みほとけのおじひを頂き

極楽往生をここから念じます。

そう心に誓ってこころ安らかにお精りよう

さまを

十五日の夕べにはみくにへお送りしよう。

七月は

八月は

お盆だ。

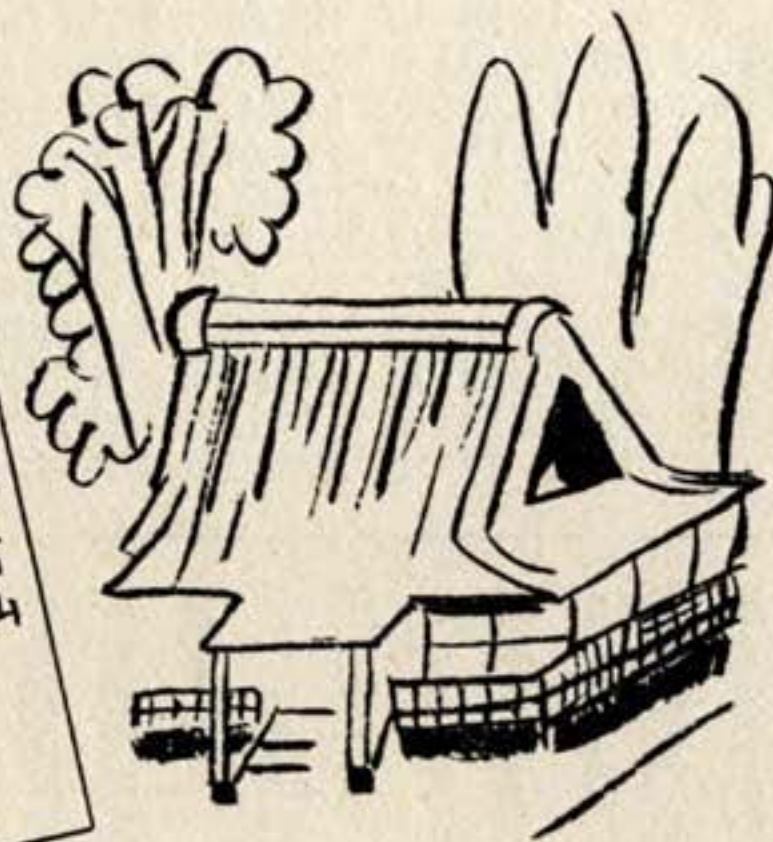
心はずませて、民族のこころの深い深い
ところまで泌みこんだ またとない 有難
いこの真実を、うらほん会を迎えよう。

× × × × ×

一口に、「お盆」というが、詳しくは、盂

蘭盆と言ひ、梵語を音でうつしたものを略し
てたんに盆と言ったのである。これについて
は色々の考え方もあるが、盂蘭盆経というお
経によって考えることが一番いいと思う。こ
れによれば、うらほんは、さかさまにつりさ
げられるような苦しみから救われるという意
味で、お経によると、お釈迦さまの弟子の目

連という方が通力で、亡くなった自分の両親
にその恩に報いようとみると母親が餓鬼の中
に生れ食べるものもたべられずに骨と皮にな
っているのを見ておどろき悲しんだがどうに
もならず、仏様に告げどうしたらよいかを
おたずねしたところ七月の十五日に七世の父母



七月。日午後三時於當山
大施餓鬼會嚴修
極樂寺

及び現在の父母のために沢山の御馳走を器に
盛り十方の仏僧に供養すれば、さかさにつり

さげられているような苦しみも救われるであ
ろうと申された。その通りにしたら目連の母
親の苦しみが救われたという。

このお経によって七月十五日には亡き人の
お祭りをすることになった。

日本で行われる様になったのは、推古天皇
の頃であるというから今から千数百年も前の
ことである。寺毎に四月八日と七月十五日に
お祭りをするようにというふれが出されてい
る。宮中などでもこれを行い後には一般に広
く行われるようになった。亡き人のみたまを
お祭りするという信仰から、魂祭り、と呼ん
だり亡き人の方からすればよろこばしいこと
であるから、歓喜会などもよんでいる。ま
ことによいことばだ。うらほんという梵語を
用いるよりも、歓喜会ということばがあるか
らにはこれを用いたいものだ。

むづかしく申せば仏教では実体的な靈魂と
いうものは説かないのですが、善因善果、悪
因悪果、輪廻転生等の考えは、仏教の中に深
く根強く植えつけられています。特に民族信
仰となっています。一般に信じられている古
い民俗信仰と仏教と結びついてゆかしい報恩

念仏飛行



関東大震災の折に、当時の増上寺法主道重大僧正は飛行機の上から華を散じて、天災の犠牲者たちの霊を慰めたことは、今に残る有名な話である。

何しろ大正十二年の話であるから、今のようには世界中をひとびにする飛行機とは大変な違いであつて、飛べば落ちることのように考へられ、甚だしく信用のないものであつた。

従つて道重法主のこの計画に対しては側近はもとより多くの人たちから猛反対された。それに飛行機に乗ることだけで、非常に珍しいことであつたから、この反対は当然のことでもあつたが、それを

押してというより、実は法主はこつそり機上の人となり、後で側近のきもを冷やさせた。

それが近頃では人命を救うにも空中から、田畑を消毒するにも空中から、ということになり、警視総監が空から通行状態を眺めて、改めて東京の道路が狭いのに驚いたという時代である。

従つて坊さんが空から読経しても不思議はないわけであるが、京都府長岡町光明寺ではこの宗組七百五十年御忌に際して、小型飛行機をチャーターし、空から下界に向つて、お念仏をさすけたそうである。尤もいかに美声の持主でも爆音とでは勝負にならないわけだ、そこは拡声器という利器を用するという近代布教であつた。

ヘリコプターがもっと実用化され今のタクシー位に乗れる時代がくればこんな話も珍しくなくなる

の行となつています。父母の恩を知り、広くまた社会恩を知ることとは仏恩を知ることでもあり、少しも仏教のみ教えに反するものではありません。

亡くなった精

霊が皈つてくるという古くから日本にある信仰

があります。精

霊迎えを門口に迎え火をたいて

いたします。夏

の夕べの家々の門べに火をたい

て、亡き父を母

を祖先のみたまを迎える。なん

とゆかしい、詩情あふれるところ根でしょう。平和を愛し恩を知り、恩を報ずること、これがやがて伸びゆく人の力となるのではないでしようか。お盆には、お施餓鬼会という行事も寺々で行われます。

これも餓えたるものに施しをし、その善根によつて亡き人々も救われ先祖への供養となるという信仰です。老いも若きも浄きみ堂に会して遠きご先祖さまの御努力に感謝し、そのみこころをなくさめその守りを祈願する行事何という尊い信仰ではないでしようか。

すぎし日は永遠であり、また輝かしい未来も永遠であります。その無限の一こまに生かされ生きている私共。

思えばかぎりのない縁に生かされて生きている私共この深い真実を知らなければなりません。

お盆のもろもろの行事は、知らずしらずのうち、この真実を身に泌みこませ、ここに泌みこませて、ひとびとを尊き道に導き、真実に美わしい道を歩ませてくれるのではないでしようか。手をとつて尊き道を歩みつけましよう。

如是
我聞

念仏に生きる詩人

戸松啓真

わたくしは、最近佐藤春夫先生と大木惇夫先生のお二人に、お会いする機会をえた。そして現代に高名な二人の詩人が、ともに法然上人に深い尊敬の念を持つておられるのを聞き深く感動したのである。一芸に達せられた文学者の信念は、なにか宗教家の信念を思わせるものがある。すぐれた文学が人間のさまざまな欲望を通してその真実を語る言葉とすれば、信仰は人間を真実へ導く光であろうかこれが、お二人にお会いして得たわたくしの感想であつた。

× × ×

大木惇夫先生のお名前は学生の頃から知っていたが、最近までその詩を読んだことがなかった。はじめて読んだのが、昭和三十四年二月一日の仏教タイムス紙に掲載された「ある死生観」である。

許されし喜びを生き、許されし悲しみを生き、生きの身の、生きの命の極みには笑つて目閉じん、禍いと幸と計りて差引きは無しと答えん、「無し」こそはいとも明るき大慈悲の初めに通え。

この詩は第二次大戦の時、乗っている船がシヤワに着く寸前敵の魚雷をうけて沈没し、フカと敵のいる海を漂流し、やがて味方に助けられるまでの体験をうたつたものである。わたくしは、これを読んで感動した。そしてこの詩人こそ、南無阿彌陀仏の信仰に生きていくにちがいないと直感した。あとで知つたのだが、先生のお父さまの家が浄土宗、お母さまの実家が真宗とのことで、まことなるかなと思つたのである。浄土宗の菩提寺というのが、増上寺山内の安養院で、その関係からか

先生に法然上人がその昔親しくもちいられた「六時礼讃」の和訳という昭和の劃期的事業が依頼されたのである。その後、先生の六時礼讃の訳詩を浄土宗の専門的立場から検討する会合が増上寺に於て持たれ、わたくしも許されて両三度その末席をけがした。今年の正月の会合のあとで、新年の祝酒がでた。先生は御酒が大好きのようで相当のまれた。わたくしは、勇をこして先生に「ある死生観」を非常な感動を持つて読んだこと、先生の六時礼讃の訳はすばらしいものになるであろう事を申し上げた。先生は大変よろこんで握手を求められ、私のようなつまらない欠点の多いもの、おろかしい罪深い者も念仏で救われるのだから、酒飲んで酔つて家へ帰るときでも念仏が言いたくなると思ひのままに言う、はなはだしきは厠で言うこともあると語られるのであつた。酔つておられたが、その声には真実の響が感じられたのである。それから後法然上人七百五十年御忌法要が増上寺でつとめられた四月某日、本堂では先生の和訳された六時礼讃行道が多くのお僧によつておごそかにつとめられた。モーニング姿に威儀を正し

た先生が、多くの信者にまじつて、静かに坐つておられた。わたくしはそれを拝見し念仏が現代にも生きていることを確信したのである。

× × ×

佐藤春夫先生をおたずねしたのは、桜の花も散つて若芽のでる春の一日であつた。このたび大正大学浄土学研究室から、一般の方々に法然上人にもつと親しんでいただきたく「絵で見る法然上人伝」を刊行したので、ちやうど朝日新聞紙上の法然上人伝「極楽から来た」を完結された先生に一本を謹呈申し上げかつは御高評をいただくためであつた。阿川文正氏鈴木成元氏と一緒に、江戸川橋から目白坂をあがつて、途中から右におれたあたりで先生のお家をさがした。その道をつきあたつたところに、赤味がかつた石塀にアーチ型の門のある家が見えた。すぐにそこだと思つた。というのは、わたくしはかつて、先生の弟子加賀淳子氏が「私はこの大きなアーチ型の門をくぐるたびに極楽浄土へ罷り出たような気になる。」と書いていたのを思い出したからである。門の近くで植木に水をそそ

いでおられたモンベ姿の御婦人に来意を告げると、こころよく招じ入れてくださつた。通された部屋は洋室の板間の一部に畳を入れた不思議なすばらしい部屋である。洋間の畳に坐つたわたくしは法然上人時代の形式に似ていると思わず笑いがこみあげた時、先程の御婦人がきちんとした着物姿で、紅茶とお菓子を持つてこられた。その方が奥様であつた。先生は、わたくし達の願いをこころよく聞かれた後、「極楽から来た」を書きたいきさつやその反響が僧よりも一般の読者から多くあつたこと単行本の出版社が高価な本で一般向でないから千部刷るといつた時、決して高くないから三千部刷らせたことなどを話された。またお念仏は一般的であるが、上人の伝記が小説として書き難いのは、上人の性格や生涯が真面目だからである。現代に於て法然上人の教えは細い流れとみられるが、その教えは真実のものであるから、やがてまた大きな流れになるであらう。そして真実なるが故に、これを後世に伝えるという努力が必要であり、私もそれを確信するから法然上人を書くのである。私は只今、僧竜彦氏の助力をえ

て資料をあつめていたので、今年の末頃にはすべてをふくんだ長篇の「法然上人正伝」を書き上げるつもりである。このように語る先生の言葉にはなんのよどみもなかつた。辞去するにあたつて、所持してきた新刊「極楽から来た」の扉に署名をお願いした。先生は硯を奥様に命じられた。硯はわたくしが坐つてゐる座卓の下にあつた。奥様はそれをとろうとして、手がわたくしの膝に、かすかにふれた。その時、わたくしは、ふと先生の奥様がかつて谷崎潤一郎夫人であつたことを思い出したのである。その日帰つてわたくしは、佐藤春夫先生つくるところの法然上人頌の次の一節をある感慨と感動とをもつて読んだのである。

煩惱を絶てとは告(の)らず

みだれたる心もゆるし

人間の性(さが)のまにまに

み仏の国に往き生く

この道は誰かひらきし

なさけある慕はしの

われらが祖師や

× × ×

二人の詩人とも若い頃キリストに関心を持つておられたということは、興味深いことである。

佐藤先生の作品年譜には、キリストに関する作品はないようであるが、「聖書は中学生の頃、クリスチャンの友人があつて、すすめられたのが最初だが、今でもある意味で枕頭の書といつてよい。新約も旧約も読んでいるが、新約は、今の改約よりも、昔の古い訳が好きだ。もつともキリストは好きだが、宗教

としてのキリスト教はきらいだ。」(岩波新書「現代の作家」より)とのべている。

北原白秋門下の大木先生には、「嵐の十字架」「基督の生涯」などの詩作がある。先生は二十二才で広島より上京し、富士見町教会で洗礼を受けられている。その後、先生はいろいろなことに絶望し懷疑し、ずいぶん悩まれたようであるが、年をとるに従つて、だんだん仏教のよさがわかり、それに帰つてきたと語られている。(講演「ある死生観」より)

この二人のすぐれた詩人のお話を直接聞きえたことはこの上ない喜びであつた。

宗教家としての法然上人は、底ぬけに偉大である。わたくしなどは、上人に学びながらもその偉大さをわからずに過ぎるかも知れぬ煩惱具足の身はただ念仏するのみである。

二人の詩人はやがて法然について或は親鸞について念仏について生きた立派な作品を発表されることであろう。二人の詩人の精神史については別に人をえて語つていただきたい

会員だより

○内容をもつと易しく、

これまで当寺文書伝道費から貴誌を配布してきましたが、今回あ

る総代から浄土施本の檀信徒効果

調査を命ぜられました。その結果

どうも難しいというのが七割で、

この人たちは配布に対し「どうで

もよい」との回答を寄せました。

○宗教が復興するとは

摩尼先生の「インスタント時代

しています、浄土学の研究を奨

めているものでありません。小生 教課長だけあつて、興味深く拝見 をしました。「少年テロの問題に としては檀信徒が低級だからとは しました。同時に仲々ご苦勞の多 思つていませんし、伝道部の予算 事を知り益々御健闘あらんこと を祈ります。

先生の、禅も念仏もおしなべて

小乗化しているように思えてなら

ないとの言葉は、いろいろのこと

を考へさせるものでした。また罪

悪に対する問題について「私は無

宗教者に宗教を語らせる、という

おかしなことをしているのです」

とあるのに対し真に恥かしい思い たいと存じます。(山形、小泉)

小さき精霊たち

牧尾良海



天宝年間のこと、趙生という人があった。

先考は文章の道で令名のあった人であり、彼の兄弟たちも何れも秀才で、進士に選ばれて明経の科及第でそれぞれ官途に就いていた。

ところが、独り趙生だけは生れつき魯鈍で、書物を読んでいても、どこで句読（くとう）をつけ、どう解釈してよいのか分らなかった。

こんな風であつたから、壮年になつても

郡の貢生にもなれないで肩身のせまい思いをしていた。兄弟や友人たちとの宴席に列した時などは、皆がきらびやかに朱で縁取（ふちどり）をした官服ですらりと並んでいるのに趙生だけは白服で少しも面白くなかつた。酒

がたけなわになつて座が弾んで来ると、露骨に蔑（あ）すみの色をうかべて彼の方を見る者もあつた。

屈辱感と自己嫌惡とで胸の中が煮え沸るほどであつたが、それから間もなく、ある日ひそかに家出をして晋陽山に隠れ入り、茅ぶきの小屋を造つて住むことにした。

彼は、書籍を百何冊か持っていたので、家出をする時それを背負つて来たのであるが、山にこもつてからというもの、昼は書を読み夜は休むという生活を始め、寒暑空腹をもともせず、粟を食し粗末な麻布を重ね着してもと覺悟をきめ、労苦をいとわず頑張つたが

読めば読むほど頭がぼうつとしてくる始末で、どんなに努力してもさっぱり効果が上らなかつた。彼は己れの鈍さにほとほとあきれて悲しみ且つは怒つたが、しかしそれでも初めの一念を変えなかつた。

それから十日ほど経つてからのことである。一人の、毛布をまとつた老人が、彼の小屋へやつて来て、やおらに口を開いた。

「あんたはこうして深山の中へ隠れひそんで、古人の書を懸命に読んでいなさるが、恐らくやがては仕官をせんとおの御所存であろう。然し、大分長くかかつて学ばれても一向に句読や意義がつかめぬ様じゃが、一体どうしてそんなにもたついて居なさるのじゃ？」

趙生は申し訳なさそうに言つた。

「私は頭が良くないので、このまま生きていても無用の長物だと自ら悟つてこの深山に入りこみ、古書を読んで自分で楽しんでゐるのです。たとえ深奥の精しいところは解らぬまでも、この一筋に勵んで文名の高かつた先

考の名を辱かしめぬようにと考えているので
す。仕官に役立てようなどとは毛頭思つては
おりません。」

「成る程、あんたのそのお志は堅固で見上
げたものですわい。このおいほれにはあんた
をお助けする何の手だてとはござらぬが、
ともかくも一度この儂を訪ねておいでなさ
れ。」

老人がこう言うので、何処に住んでいるの
かと確かめると、

「儂は段氏の家の者じゃ。家はこの山の西
の大木の下にありますのじゃ。」

と言ひ、言ひ終るやいなや、忽然と見えなく
なつてしまった。

趙生は、けつたいなこともあるものだ、き
つと何か妖怪変化の仕業であらうと思つた。

そのうちに、ともかく山西へ出かけて行つ
てみることにした。あちらこちらと探しても
家らしいものは一軒もなく、ただ一本の盛ん
に生ひ茂つたむくげの木が見つかった。

「さてはこの木のことを段氏の家といった
ものであらう。」

趙生は、鋤を持って来てそのむくげの大木

の下を掘つてみると、一尺余りもある山人参
が見つかったが、ひねこびたその人参の様子
は、先に出会つた老人の顔や姿にそっくりで
あつた。

「人参はよく不可思議なはたらきをするも
のと聞いていたが、自分の頭の病氣もこれで
治すことができるかも知れないぞ。」

こう考えて、趙生は早速この人参を煎じて
飲んでみた。それからというもの、彼の頭は
まるで眠りから醒めた時の様にはっきりして
来て、どんな難かしいものを読んでもすつか
りその奥義を理解することができるようにな
つた。のち一年ほど経つと、明経科の試験に
も及第し、色々の官職を歴任して歿したとい
うことである。

二

長安の雲花寺の中に、聖画殿という建物
があり、長安の人々はこれを七聖の画くところ
と言つていた。

この堂が始めて造られた時のことである。
寺では画工を呼んで来て、堂内の彩色をやつ
てもらおうとしたが、画工の言う値段が余り
にも高くて、寺側の予算と折り合わないので

画工は帰つてしまつた。

それから数日経つた或る日のこと、二人の
少年が寺へやつて来て、住僧に面会を求め
た。

「私たちは画を上手に描くことができま
す。今、こちらのお寺では、画工に命じて新
しいお堂の彩色をさせようとしていらつしや
ると聞いて参りましたが、私たちは格別利益
を目的とするものではありませんから、如何
でしょう、私たちにそれをやらせてみてはく
れませんか？」

二人はこう言つたが、寺僧の方ではどの程
度に画をかく手を持つてゐるのか、先ず下調
べの必要があると考へた。そこで、何かこれ
までの作品を見せるように要求すると、少年
は、

「私たち兄弟みんな七人ですが、これま
でまだ長安市中では描いたことがありません
から、作品とてあらう筈がございません。」と
言つた。寺の方では、それじゃ問題にならぬ
どうもいい加減なことを言つてゐるにちがひ
ないとして難色を示すと、

「私たちは何も報酬を頂こうというのでは

ありませんから、若し私たちの彩色が和尚さまのお気に入らないようなら、上を又こてでひとなすりなさって消して下されば、それでもともとではありませんか？」

と言うのである。寺の方でも、無料で描くと言うのだからと考えて、とまれ、やらせてみることにした。

さて、その翌日、果して七人の少年がめいめい絵道具を持って雲花寺へやって来た。いよいよそのお堂の中へ入ろうとする時に、少年たちは寺の僧と約束をして言った。

「今日から七日間は、必ずこのお堂の門を開いてはいけません。食べものや飲みものの配慮も無用です。それは風や日の光りが当ることを恐れるからです。このお堂の入口をめじ止めにして、少しの隙間もないようにして下さい。さもないと、私たちの妙手をふるうことができませんから——」

寺側では、少年たちの希望どおりにすることを確約した。

こうして、凡そ六日ほどが過ぎたが、堂内は寂然としたままで、物音一つ聞えて来なかった。堂の外では、寺僧たちもそろそろ心配

になって来て、

「これはきつと、何かの妖怪が化けて入りこんだにちがいない。」

と話し合い、約束したことも忘れて、とうとう入口の塗りこめの封を落してしまった。

堂の戸が左右に押し開かれると、こはいかに、中から突然にバタバタと七羽の鳩が飛び出して来て、人々があつけにとられて眼をみはっている前を掠め、そのまま宙空高く飛び去って行った。よく見ると堂内の絵画彩色は実に見事にでき上っていて、四方の内部のうち、ただ西北の壁面の一部だけが描ききれずに空しく白々と残っていた。

その後ここを訪れた画工がこれを見て大いに驚ろき、

「これこそ真に絶妙の筆致と言うべきであろう。」

と、息をのんで賛歎したのであった。余りにも精妙な出来ばえなので、残った個所に加筆して彩色を継ぐ勇氣のある者は、遂々現われなかったということである。

三

元和の御代のこと、博陵県出身の崔某とい

う人があり、汝鄭から移って来て長安の延福里に寓居を構えていた。

ある日のことである。窓の下の所で書見をしていると、ひょっこりと一人の小童が庭へ現われた。背丈は一尺足らずではさほさの頭をしており、黄色い着物をまとっていた。この小人は北側の垣の下から走り出ると、つかつかと崔氏のいる長椅子の前へ進んで声をかけた。

「どうか、私を貴方のお硯の傍におれるようにして下さいませんか？」

崔氏が黙ったまましていると、

「私はまだ充分に健全なのですから、貴方のお手元で使っていただきたく思っておりますのに、これは又ひどく冷淡なおあしらいを受けたものですなあ。」

と言うのである。崔氏はまだふり向きもしなっていた。そのうちに小人は長椅子の上へ上り、うで組みをしておどる様にそのあたりを動いていたが、やがて袖の中から小さな一幅の文書を取り出して崔の前へおいた。見ると一篇の詩で栗つぶの様な細字で書いてあったが、はっきりした字画である。

「昔、蒙恬の恵みをうけたるも

ついで仲叔に投棄せられたり。

もし、君それを指役し給わされば

何処にか銀の筆かけを求めんや。」

崔氏は笑って小人の方を見ながら

「私の手元においてももらいたいとのことだが、後悔しないかね。」

と言うと、小人は又別の一詩をとり出して机の上においた。その詩はこうである。

「学問は君これを有し給えば、

詩書は吾によりて伝え行かむ。

須らく知るべし、王逸少の

名価千年の後まで動かすことを。」

「私には、昔の王逸少ほどの芸能はないから、お前さんがいてくれても、用いきれまいよ。」

崔氏が言う、小人は又一篇の詩をとり出して見せた。

「音信千里にも通わしむべく、

書箋縦横に竜蛇を躍らしむ。

恨むらくは江湖の人の賞せざるを、

縁に应じては自ら好文章を負わん。」

さて、崔氏がたわむれて

「お前さんが、五色の身でないことが残念だね。」

と言うと、黄衣の小人はにやりと笑って長椅子から飛び下り又北側の垣の所へ走って行って、小さな穴の中へ消えてしまった。

崔氏は早速、下僕に命じてその下の所を掘らせると、一本の文筆が出て来た。墨をふくませて書いてみると、筆先はまるで新品の筆の様に鋭かった。楽しんで使いつつ、一月余も経ったが、それからは何ら変わったことも起きなかった。

（宣室志）

工場と教育

旅に出て、車窓から眺める風景は、どこもここも工場の新設が目立って多い。もとより土地を得るには、地方に進出するしか途がないためであるが、一方小都市や農村には工場誘致なる合言葉があった。例えば土地買収の斡旋を行う他町村を驚かせたものである。

とか、当初の何年間かは固定資産税を免除するとか、いろいろ便宜を与えて自分の土地に工場を誘致しようとするものであった。山口県玖珂郡和木村で、今回

工場があるかないかでは、その都市や町村が小さければ小さい程税金収入に重要な問題となる。従って隣り合った甲と乙とで税率が可成り違ってくるし、公共施設に大きな差等が生じてくるのも当然である。こんな結構な条例

神奈川県足柄上郡南足柄町には他の大工場がある為である。



生 ま て い る 宗 祖

竹 中 信 常

一 は じ め に

今日まで、地球はまるいものと知っていても、誰一人として、自分の目でこれを見たものはなかった。ソ連が人間宇宙船を打ち上げて、カガーリン少佐が人類で地球のまるいことを肉眼で見た第一人者となった。

地上数千キロの高度から、地球をみれば、日本などはどこにあるかわからぬくらい小さくみえるだろう。世はまさに「巨視的時代」となった。東京芝の増上寺裏にそびえる東京タワーが連日満員なのも高いところに上がって地上を眺めたい。せせこましい地上のわずらわしさを、せめてひとときでも抜け出たいという、現代人の欲求のしからしめるところとってさしつかえあるまい。

ものごとを高い立場から、大きくまとめてゆこうとするのが、現代、とくに二十一世紀にさしかかった現代の人々

の考え方である。ものの見方、ものの考え方が世界的、宇宙的になって来たのである。こうした時代の中で、この春いとなまれた宗祖の七百五十回御忌もやはりその意味は大きく変って来ていると思う。「御忌」ということばの感じ、七百五十年という年月の積み重ね。そういったものから我々が受ける感じは、七百五十年という時の流れと、それが現在にまでつづいているという歴史意識である。そして二言目にいわれることは「この前の七百回忌の時はこうだった、ああった」という回顧的詠歎である。いままでの考え方からすれば、このようならしろ向きの見方も許るされたであろうが、今日ではそうは行かない。地球のまるいことが現実には眺められる時代であり、地球一周が一時間半で出来る時代なのである。この距離の短縮は当然時間の上にも作用する。七百五十年は一瞬の間になった。いうならば、宗祖は現代に生きておられるのである。従って、ふりかえ

った御忌ではなしに、先にむかつての御忌でなければなら
ないのである。「宗祖を現代に生かす」のではなしに、「現
代に生きておられる宗祖」なのである。御忌は我々が将来
においていとなむべきことなのである。

「前むきの御忌」が主張されるのはこうした意味からであ
る。そして、この「前むきの御忌」とは宗祖の教え——念
仏信仰——を以って現代に方向性を与えること、時代に随
順するのではなしに、時代を大きく導いてゆくことにほか
ならない。

「学問は選択集にすぐべからず」毘沙門堂明禪をしてかく
歎せしめたほどに、一世を風靡し、当代の思想を支配した
選択本願念仏集が、ここに再びとりあげられねばならぬの
は、全く上に述べたような理由によるものであり、現代に
生きる宗祖のことばを我々は新しい受けとり方を以つてき
くべきであろう。

二 選択集を選択する

時間と空間とが極端にちぎまってしまった現代に生きる
人々は、おそろしくセツカチであり、面倒くさいことが嫌
いである。本願念仏のありがたさを、淳々と説いたとして
も、おそらくは聞きもしないし、また解ろうともしない。
折角、千古の名著といわれる選択集をもそのままのかたち

で与えては、猫にコバンである。宗祖の時代にはそれがそ
のままにうけ入れられ、あのように盛んな念仏信仰をまき
おこしたのである。それが今日では、その専門家であるべ
き浄土宗の坊さんでさえ、一部の人を除いては選択集を読
むことはむろん、その内容をすら聞こうとしない。末法も
これだけ深刻になれば大したもののである。

のちに詳しく述べるであろうように、選択集は宗祖が全
仏教体系の中から、弥陀の本願念仏を選びとって、これを
組織的に述べられたものである。——宗祖が選んだのでは

ない。阿弥陀仏が法蔵菩薩の時に二百一十億土の中から選
ばれたのだ——といった「宗乗」の論議はこの際敬遠する
こととする。いや、かかる論議のくりかえしが今日の結果
をまねいたのだから、何をかいわんやである。先にもいっ
たとおり、現代人はセツカチである。論議よりは結論が早
くほしい。そのものズバリで行かねばならない。あえてい
うならば、かりに法蔵菩薩が選ばれたにしても、これを再
度選ばれたのは宗祖である。更にいうならば、「現代に生
きる宗祖」は更にまた、セツカチの現代人のために、選択
集をもう一度選択して下さるにちがいない。

これもまた後に再び出て来る問題であるが、宗祖の選択
の規準は「人」にあった。いわば「人間の能力」というこ
とに規準をおいて、その規準、即ち出来ることと出来ない

ことをはっきりと区別して、出来ないことはどんどん捨て去られたのである。いうまでもなく、その場合の「人」とは、宗祖が在世された八百年昔の、平安末期の人々である。当時の人々の仏道修行の「可能性」——むずかしくいえば「機根」——に照らして、選択されたのである。

ところが、人も時代も大きく変っている。平安の者と二十世紀の今日とでは大変なちがひがある。そのちがひを無視して八百年前のそのままの規準をあてはめようとしても、それは無理な話である。現代人には現代人の機根があり、それは平安人の機根とはまるでちがったものとなっている。八百年前のワケはここでもう一度、はめなおされねばならなくなった。

「選択集」は再度「選択」されねばならぬのである。

誰が「選択するのか」「宗祖」がされるのである。いわば「現代に生きる宗祖」が選択されるのが理想的である。

それには宗祖を「現代に生かさねばならない」。では宗祖を現代に生かすものは「誰」か。ここに至って、もはや私のいうべき言葉は尽きるのである。暗愚なる私をしてこれに答えしめるほどに、本誌の読者は頑迷ではないと確信する。

異学の私が「私解」と銘打ってあえて本稿を草しにかかった所以を賢察されたい。

三 好きなものはあとで

幼児が食事をしているのをみていると、余り好きでないものから順にたべて、自分の一番好きな、おいしいおかずが一番最後にとっておいて、たのしみながらこれをたべるおとなは逆で、一番おいしそうなものからたべ始めて、全体を万遍なく平らげてしまうようである。

三品か四品の料理をたべるのにも、このようなちがひがある。

八万四千の法門といわれるほどに数多い法門の中から一番すぐれたものを選び出せといわれれば、たいていの人はまごつくであろう。選ぶには、いまいったように二通りの方法がある。幼児のように好ましくないものを順にとりのぞいて行く方法か、おとなのように、一番よいものを沢山の中から拾い上げるかである。

一方は「選捨」であり他方は「選取」である。同じく「選ぶ」のであるが、「捨てる」と「拾う」とでは、大変な相違がある。

こまかくいうと、選捨の方は一つ一つのものをしらべて、そこに捨てるべき理由を見つけ出してゆくのである。いわば欠点をつきとめて行くのである。選取の方は反対で、沢山のものの中から、拾うべき理由のあるもの、すな

わち長所をそなえているものを拾い上げるのである。一方

は「これもダメ、あれもダメ」といってえりわけるのであり、他方は「これもいい、あれもいい」といってかかえ込んでしまう。デパートの特売場で御婦人達の買物の仕方を

みているのと同じである。はたしてそのどちらがいいか、悪いかということとはとに角として、選ぶ態度に二通りあることにまづ注意しておきたい。

宗祖はどちらの態度をとられたのか。いうまでもなく、「捨てる」方である。「選択とはすなわちこれ選捨の義なり」といわれている。

そしてこの態度は選択集全巻を通じて、一貫してとられていると同時に、元祖が当時の仏教に対してとられた態度でもあったといえよう。

四 貧乏人の買いもの

ところで、ものを選ぶには、選ぶ規準が必要である。一定のワクをきめるか或程度の水準を定めて、これに当てはめてみる必要がある。食べものを選ぶには、自分の好きき

らいが規準になる。好きなものはおいしい。嫌いなものはまずい。法門を選ぶには、自分の好ききらいをいうわけにはゆかぬが、それでもそこに一定の規準が必要である。その規準のきめ方が、元祖以前の各宗の祖師達と元祖ではま

るでちがうのである。 選捨と選取という態度のちがいきょういところから出て来たのかもしれない。

一つの宗派を新しく立てるには、何故、別に新しく一宗をおこさねばならないかという大義名分を明かにしなければならぬ。その名分の一つとして、全仏教を色々に分類して階位づけることが行われて来た。「教相判釈」という言葉であらわされる。天台宗の五時八教、真言宗の顕密二教などがこれである。このように全仏教を一つの大きな組織にまとめて、その中のどこに自分の宗旨が位置するのかわかることを、はっきりと打ち出すことが必要である。しかもその場合、自宗の位置を最もすぐれたところ、最も高いところ、置くのが普通である。この「最もすぐれた」「最も高い」ということをきめる規準は、全仏教の教義論を通じて定めるのであって、いわば理論的にすぐれているということにはかならない。

これが宗祖以前の祖師達が常におこなって来た仏教の評価のワクであった。

ところが、仏教は「仏道」ともいわれる。仏道とは「ほとけになる道」である。道とは歩くためにあるのである。歩かねば仏道の意味はない。いうならば、実際に信じ行うのでなければ仏教は存在しない。祖師達が、いくら「最勝

の法」「最高の法」を立て示めしてくれても、これを實際に行うのでなければ、それは絵にかいたボタ餅にひとしらい。自分のフトコロ具合をぬきにして、宝石店のショーウインドを眺めているようなものである。

いいことは分っているが、自分の手には届かないのである。はたしてこれで仏道といえるだろうか。

ここに宗祖は心づかれたのである。それまでの仏教が、自分の身分をわきまえずに、むやみに立派なものに目をうばわれていたのに対して、宗祖は、まず第一に一体自分はいくら持っているのだろうかと自分のフトコロ勘定をされたのである。

自分ばかりではない、自分をと리카こむ世の中の大勢の人々、いわゆる末法の時代の凡夫の身をかえりみられたのである。そして、その結果「囊中無一物」であることを発

見された。「われは烏帽子もきぬ法然房」であるとされ、「一文不知の愚鈍の身」を味われたのである。いままでの

祖師達はこちら側の都合を考えずに、ただいいもの高いものとさがしまわっていたのだが、宗祖は、こちら側のことを念頭におかれて、貧乏人、おろかももの、つみ深い者、そ

ういった人々でも、買えるものはないかとさがされたのである。だから、一度はよいなあと手にとりあげてもいやいやこれは高価すぎると思いなおされて、これを捨

て、また次のを手にとって、これでもまだ高価すぎると傍らに置かれ、そのように選り捨て、選り捨ててゆかれたのである。

いまを去る七百七十五年の昔、宗祖五十四才の元治二年の秋、京都の北郊、大原の勝林院で浄土法門についての問答がおこなわれた。問答とはいうが、内実は今日の言葉でいう「宗祖にものを聴く会」といったものであったが、そのことを後に弟子の一人信寂房に語られて、

「法門は牛角（ごかく）の論なりしかども、機根くらべには源空勝ちたり………」

というておられる。いうまでもなく「機根」とは、人間の持つ「宗教的能力」である。たとえていえば、フトコロ具合である。

そして、当時の大衆のフトコロ具合、すなわち「機根」についての宗祖の判定は正しく精確であったので、問答をしかけた人々もこれを承服したのである。宗祖の判定とは何か。

それは先にもいったように、当時の大衆はすべてみなスキャンピンの貧乏人で、とてもとても最勝最高のものなどは買えないというのであった。

〔文学博士〕

あとがき

誰にもいわなかった秘話なのです。きかけています。これも御遠忌報が、初めて発表されたわけです。恩の一端というわけで、大方の共

◇佐藤賢順先生は、歐洲から帰ら

れてのお疲れもすつかり治り、先

◇牧尾良海先生は、吉岡先生同様

般も城南組の七百五十年御忌をこ

◇鈴木成元先生は、日本史学が専

自坊の願行寺で厳修されました。

◇大橋俊雄先生の高僧伝は、いず

◇竹中信常先生は、いつ歐洲に行

たか、日本に影響を与えた話とか

つたのかと思われる位に、お疲れ

のことは別としても、実はこれま

もなく御元気です。ご自坊では隆

で日本で未発表の話だけを選んで

崇幼稚園を経営されていますが、

特に本誌上を飾って頂いているの

先日テレビで紹介され、一躍有名

です。かかることは恐らく会員各

になりました。

位のご存知なかつたことと思いま

本号から「選択本願念仏集」の

すが、日本では初訳のものばかり

解説を連載して頂きます。浄土宗

というところに先生の面目があり

の根本宝典であるべきものなのに

ます。また先生は大田区教育委

難解のため、余り親しまれていな

員会委員長ですが、水難防止会長

いのも事実です。この際先生の麗

を初めいろいろの名誉職をもたれ

筆によつて、選択集に接すること

日夜ご多忙を極めています。

ができるわけで、ご期待下さい。

◇佐藤良智先生は「真理のはなた

◇吉岡義豊先生は道教の研究を以

ば」でもご承知の通り詩才豊かな

て知られています。今回は珍し

先生です。相変らずご元気で活躍

い先生の体験談を頂きました。冥

さされていますが、近頃は正大に伝

官でもない先生のこの話は、実は

道部を再編成すべく、各方面に働

た。厚く御礼申し上げます。

事務所を移転しました。これま

事務所は竹中先生のご自宅で

したが、長らくお世話になりました

東京都千代田区飯田町二ノ八

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一カ年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 七月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十六年六月廿五日 印刷

昭和三十六年七月一日 発行

定価 五十円

編集人 村瀬秀雄

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式

会社

東京都千代田区飯田町二ノ八

発行所 法然上人顕仰会

電話東京三三二局五九四四番

振替東京八二一八七番

☆☆信仰の「泉」浄土トラクト☆☆

新刊 浄土トラクト

在家の方々の為の

村瀬秀雄著

浄土宗勤行の解説

新書版九〇頁
定価七〇〇円
送料二〇〇円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行
旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に
改訂、版も持ち易い新書版として刊行

(百部以上五分引送料無料)

大正大学教授 佐藤良智著

真理のはなたば

新書版
定価七十円
送料二〇円

若き人びとにおくる仏教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

東京都千代田区飯田町二ノ八

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和三十六年六月二十五日印刷 昭和三十六年七月一日発行

浄土

第二十七卷

第七号

定価金五拾円 (送料六円)

日本一の生産・設備

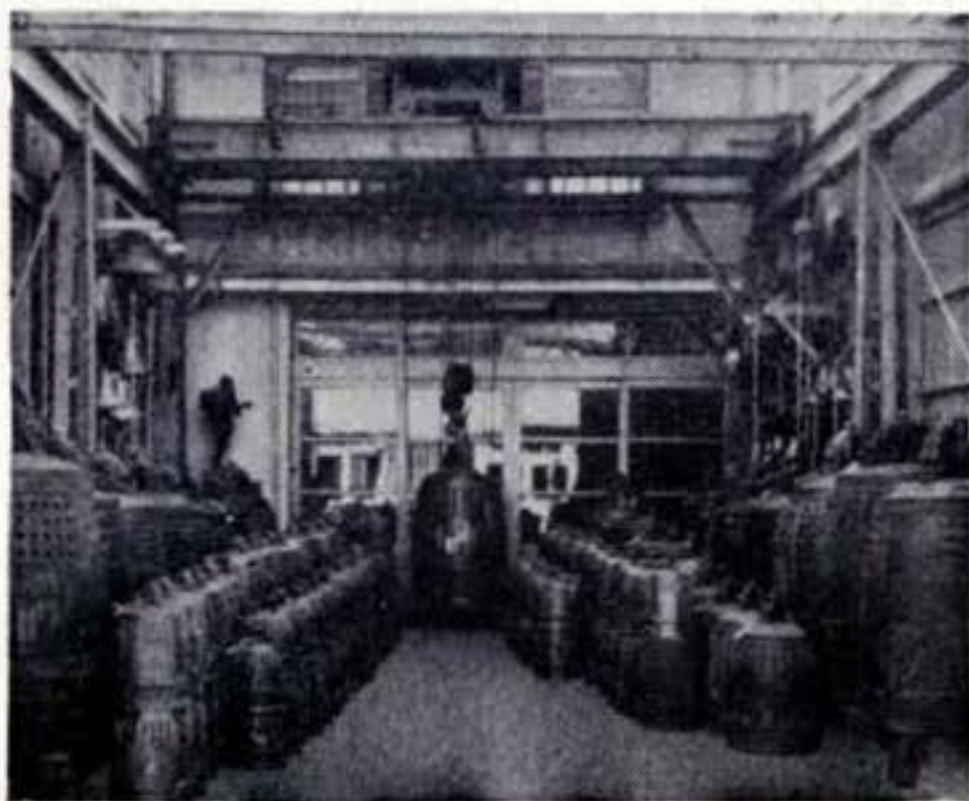
梵鐘 (45cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm~51cm)

音響物理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展参事香取正彦先生
芸術院賞受賞



日本最初の黄綬褒賞

(昭和三十年四月廿七日)

鑄物師 老子次右衛門翁

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分 (梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社

老子製作所 大阪支店

電話大阪 (34) 8847番 本社工場 高岡市横田